

---

# BLUE DAWN

汐崎シオン

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

BLUE DAWN

### 【Nコード】

N0584G

### 【作者名】

汐崎シオン

### 【あらすじ】

吸血鬼に血を吸われた女子高生ミカ。下僕として手なずけられそうになっていた彼女を救ったのは、【ヴァマイラ】と呼ばれる半吸血鬼のヴァンパイアハンター達だった。彼らは、忌まわしく呪われた【闇の力】を駆使し夜の街へと狩りに出る。

## 序 牙を狩る者

夕焼けに染まる仙台。

杜の都の中心を突き抜けて延びるアーケードは、会社や学校を終えて行き交う人々で賑わっていた。私は地下鉄の駅から地上に出ると、押し寄せる人の流れを縫う様にアーケードを一ブロックだけ歩き、ケータイショップの角を曲がってアーケードを出た。

『角を曲がる』ただそれだけの行動で満員電車から降りたような心地よい開放感を感じるのは私だけではないだろう。私は人混みが苦手だ。他人と比較したことは無いが、パーソナルスペースには敏感なタイプの人間なのだろう。私のパーソナルスペースについて触れたついでに、少しだけ私自身の事も話しておこう。

私の名前はヨハン・スタンクラウド。イギリス人だ。外見的には定年を迎えた年齢に見えるだろうが、実際のところ、年齢は覚えていない。仙台で暮らし始めてもう八年、ロンドンに残してきた妻がいるが、子供はいない。好きなものはフットボール、嫌いなものは肉じゃがだ。悪癖を挙げるとすれば、歩き煙草。その点に関して言わせてもらえれば、この数年で仙台も歩き辛い街になったと言える。

脇道に立ち並ぶビルの壁を夕陽が赤く染めている。昼と夜が入り乱れている生活をしている私には、夕陽という自然現象に対して、家路へと誘うといったようなノスタルジーは感じることは無い。夕陽が落ちる。それは我々にとっては日々繰り返される『合図』ではないのかもしれない。

ラーメン屋の角を曲がり、眩しい西日に目を細めながら裏路地を歩く。小さな公園の数軒先、築年数をごまかす様に白く塗り上げら

れたビルがある。一階にはバー「カフェバー・アルバトロス」、そして、二階が私のオフィスだ。二階への入口は、ビル同様に錆びの上から白く塗り上げられたシャッターで閉ざされていた。

私は金属が擦れる音に顔をしかめながらシャッターを上げた。薄暗い廊下の先には古くて安っぽいダークブラウンのドアがある。私はスーツのポケットからキーを取り出してロックを解除すると、ガタがきて建て付けが悪くなったドアを思い切り押した。

背中が痒くなる様な金切り声を上げてドアが開いた。その先にある階段を上って私はオフィスへと向かう。

ガラス張りのドアを開けて出社すると、真つ先に湯を沸かしコーヒーを淹れて香りを楽しむのが私の日課だ。棚に陳列されたビンの中から『モカ・ハラー』のラベルが付いたものを手に取る。私が二番目に好きな銘柄だ。ドリッパーにフィルターをセットし、ハンデイーミルで丁寧な豆を挽いて入れる。少量の熱湯で豆を蒸らすと、濃厚なアロマが部屋中に広がる。

豆の鮮度、お湯の温度と量、この絶妙なバランスが少しでも崩れたら、この香りは楽しめない。私は湯を含んでフィルターの中で膨らむ豆を愛おしく眺めてから、ゆっくりとドリッパーを始める。もし今の私が自由に職業を選べたのなら、迷わず喫茶店のマスターを選んでいただろう。

嗜好話はこれくらいにして、早速仕事へと取り掛かるとしよう。

本業はシンプルなものだ。留守電のチェックして、新聞の求人欄を読む。ロンドンの妻へのモーニングコールを済ませると、私はTVを衛星チャンネルに切り替えコーヒークップを手に取りソファへと腰を下ろした。基本的な業務はこれで終了。巡回の時間までのひと時には、決まってタバコとコーヒーを楽しむ。私にしてみれば睡眠以上に価値のある時間ももれない。

夜八時。

私は留守電の録音スイッチを入れると、ガラスのドアをロックして階段を降りる。再び金切り声を上げるドアを押し開けて路地裏へ出ると、生暖かい夜風が頬を撫でた。「カフェバー・アルバトロスの看板には電飾が輝き、開け放たれたアンティーク調の古いドアからは賑わう中の様子が窺えた。私の巡回は必ずこの店から始まる。酒とタバコの香り。若干落としすぎの照明と揺れるように流れるアシッドジャズ。店内に入った私は入り口のドアにも負けないほど古いカウンターの一番奥に座る。」

「やあヨハンさん。いつもので良いのかい？」

銀色がかった青い長髪をツンツンに逆立たせた細身長身のバーテグが気さくに話しかけてくる。こなしている仕事はバーテンだが、イギリス人だ。イギリスにいた頃から何度か顔を合わせた事のある男で、私よりも三年後にこの街に越してきた。チャラチャラと軽いところを除けば、まあ、中々の好青年と言えるかもしれない。私はレヴィンにいつもの酒を頼むと、タバコに火をつけた。

「あつと、ヨハンさん。今週からカウンターは禁煙にしたんだ。吸うんならボックス席にしてくんないかな」

私は彼に理由を尋ねた。

「ヨハンさん。カウンターを禁煙にすると、タバコ嫌いのお姉ちゃん達がカウンターに座ってくれるだろ」

レヴィンの話も半分に私はボックス席のソファアールへと移動した。

(フン！ コレがチャラ男世代の台頭と言っやつか)

とは言うものの、ソファアの座り心地も悪くない。私は頭を仕事モードへ切り替えるために赤ワインを一気に飲み干し、まだ半分も吸っていない煙草を灰皿で揉み消した。それから、スーツの内ポケットから錠剤のタブレットを取り出し、赤いカプセルを二錠飲み込んで席を立った。カウンターにコインを置くと、レヴィンが小さなタンブラーに温めの白湯を注いで言った。

「ヨハンさん。薬は白湯で飲んだほうが早く効くらしいですよ」

私は湯気でうっすらと白みがかったタンブラーから白湯をひと飲みすると、レヴィンに手を振って店を出た。

心地よい夜風にあたりながら街を歩く。次第にワインの酔いが回り、感覚が冴え渡り始めた。

私は暫く繁華街を巡回し、ヤツらの反応を探し続ける。人影もまばらなタワービルの脇を通り過ぎた時、私は【匂い】を感じた。微かに香る死の匂いと、その中に閉じ込められた冷たく流れる血の匂い。ヴァンパイアだ。

私はビル裏の小さな公園に入り、周囲に人の温もりが無い事を確かめると、三十メートル程上のビルの側面を目指して跳躍した。冷たいビルの外壁に爪を立て、今度は垂直に跳ぶ。再び外壁に触れ再度上を目指そうとした時、私は四つ先の交差点に冷たく動くターゲットを見つけた。

体を反らせて宙返りをしながら、ゆっくりと着地。風をきって降り落ちる時の感覚は好きな方だ。地面に付いた手をほろいながら立ち上がる。ふと隣を見ると四十代のサラリーマンが今にも叫びそうな表情でこちらを見ている。

「アッ、アンタ、今、どこから？ 何で落ちてきて平気なんだよ！

「！」  
「シーー！！」

私は彼の目の前まで一気に歩み寄ると、母親が子供を静める様に人差し指を自分の唇に押し当てて男の瞳を覗き込み、怯えた視線に目を合わせる。

一秒……

二秒……

三秒……

虚ろになった彼の瞳の前で、私は指を鳴らしてからゆっくりと視線を外した。男は催眠から解けたように一瞬の間を空け、ワイシャツのポケットからタバコを取り出してライターで火を点けた。彼を真似して、私もタバコを取り出す。人間は自分と同じ仕草をする相手に好感を感じる生き物なのだ。タバコを口に啜えた時、私はバーにライターを忘れたことに気が付いた。

「すみませんが、火を貸してもらえませんか？」

私の問いかけに彼は、オレンジ色の百円ライターを私に手渡してくれた。

「ありがとう」

「日本語、お上手なんですね」

そう言ってサラリーマンは、多くの日本人と同じく、ぎこちなく笑った。

軽く微笑んで去ろうとする私に彼は、

「仙台では歩行喫煙はペナルティーですよ。外人さん」

と優しく教えてくれた。

「親切にありがとう」

角を曲がって彼の視界から消えると、私はタバコの火を消さないようにゆっくりと奴を追い始めた。

私は奴の後ろを、一定の距離を保ちながら尾行して歩いた。歩きタバコはペナルティーだが、血の臭いを消してくれるありがたい道具だ。獲物を狙って夜の街を歩く奴の体の動かし方のきこちなさから察して、おそらくはまだヴァンパイアになつて間もないのだろう。業界用語では雛ヒナと言われる部類だ。

自販機の前をふらふらと曲がり、人目につかない細い道を歩いていく奴の後ろをつけながら、生前の彼の冥福を祈る。

祈るのはいつもの儀式だ。

私は聖職者でも納棺師でもないが、もし君がこの仕事を始めれば、私が祈る理由も分かるだろう。獲物を静かに消すには、街角の死角と少しの間があれば十分だ。私はタイミングを逃さず、彼の右肩を叩いた。

「落とし物ですよ」

「えっ？」

振り向いた奴の右頬に私のタバコが突き刺さる。慌ててそれを振り払った新米吸血鬼は

「イタツ！ 痛いじゃねえか！ お前イキナリ何すんだよ」

人間らしいリアクションとしては悪くないな。が、頬が焼けて「痛い」はマズい。この場合は……

「普通、火傷をしたときは熱いって言うのじゃないかね。死んでしまっただけならいいな。ヒヨコちゃん」

私の挑発にヴァンパイアが牙を剥き出して襲ってくるよりも早く、私は彼の背中に回り込むと、スーツの懐からシルバー製の懐中時計を取り出す。もちろん聖水によって聖化された逸品だ。聖化された銀はヴァンパイアに強力なアレルギーを引き起こし、数秒で灰にしてしまう効果がある。

新米吸血鬼の背後から懐中時計のチェーンを奴の首に回して締め上げる。鎖に触れた吸血鬼の皮膚が赤く腫れ上がり、アレルギーが波のように全身に広がる。赤く腫れた皮膚がドス黒く代わり、表面から瞬く間に乾燥し、灰となって崩れ落ちる。全てはほんの一瞬の出来事だ。

コインが転がるような乾いた音と共に、二つの犬歯がアスファルトに転がり落ちた。ヴァンパイアの犬歯は奴らが塵になっても、唯一無くならない部位なのだ。私はそれを拾いあげると、いつものように歩き始めた。

カフェバー・アルバトロスのソファー席で、私は今日獲ってきた犬歯をいじりながらバーボンをちびちびとやっていた。長く伸びた吸血鬼の犬歯は、彼が吸血鬼であった事と、今は安らかに眠っているであろう事を表す象徴的なモノだ。そして、この抜け落ちた犬歯は、不思議な事にアルコールに触れると溶けて無くなってしまっただ。私は白く輝く犬歯をゆっくりとバーボンのグラスへと入れた。

エナメル質の白い塊は細かい泡を吹き出しながらゆらゆらと沈んでいった。悪くない。キレイな景色だ。

「あつ！ ちょっと、ヨハンさん。ポリデントなら家でやってください」

カウンターの青髪バーテンダーが血相を変える。私は泡の消えたバーボンを一気に飲み干し、コインをカウンターへ転がして店を出た。

外は霧のように細かい雨が、風に煽られて斜めに降っていた。私は妻の居るロンドンの町並みに思いを巡らしながら雨の中をゆっくりと歩き出した。

## 第1夜 真夜中のレンタルお姉さん

閑静な住宅街の道路。街頭の光も届かぬような深い闇の中を歩く一人の少女。

シヨートヘアの前髪から垣間見える彼女の眼は虚ろで、部屋着のまま靴も履かずに裸足でアスファルトの道を歩いていた。

公園の角を曲がり、その先にある林へと向かう。夏の夜の独特な匂いの中を進む足取りはすり足の様で、地面すれすれを浮いているかの様に木々の間を抜けていった。道を覆う木々はどんな光りをも遮るかの如くそびえ、昼間のそれよりも大きく感じられた。

木々の闇で作られたドームの中に一人の人影。彼はふらふらと近づいてくる少女を満足げに眺めると、立っていた木の太枝から優雅に舞いおりた。着地の音も無く、地面に浮かぶような足取りで彼女を出迎え両手を広げる。少女は無表情のまま、彼の胸に抱かれた。

「私は良い素材を手に入れた。君はもうすぐ私の忠実なる下僕となるのだよ」

彼はそう言って少女の髪をなでた。彼女は暗い虚空を見つめたまままゆつくりと頷く。

男は少女を抱いて再び先程の大枝へと跳躍すると、少女の頬を愛おしそうに撫で、自分の右手首を彼女の口元にかざした。差し出した彼の手は異常なまでに白く、暗闇の中で微かに光を帯びているかのようにも見えた。

少女はその手首に小さく二度三度と口づけをすると、小さく生え始めた牙で優しく彼の手首を噛んだ。彼女はじわじわと溢れ出る冷たい血液の味に高揚し、焦点の合わない瞳を閉じた。自分の腕の中で次第に息が荒くなる彼女の仕草を見下ろしていた彼は、血液を吸

血し続ける彼女を抱きしめると、その首筋にゆっくりと牙を立て、静かに吸血を始めた。腕の中の彼女は、彼の血を吸いながら自分の血を吸われる行為に溺れ、ピクピクと体を痙攣させていた。

二人を包み込むように風の音が流れる。木の葉も揺らさずにそびえる木々のドーム、漆黒の中で、二人の肌の白さだけが浮かんで見えた。

品の良いインテリアの素材は全てマホガニー。白塗りの壁と、丁寧にワックスで仕上げされたフローリング。常に薄暗い室内には蠟燭の火が揺らめいて、音を消されたテレビには金色のユニフォームを着たフットボールチームが引分けを挟んで三連勝したニュースが流れていた。

お香が立ち込める室内に、ムソルグスキーの名曲【**展覧会の絵**】の着信メロディーが流れる。ソファで寝ていたヨハンは、胸の上に広げたままの新聞紙を頭に被り寝返りを打つ。

(留守電にでも任せておこう。)

ほどなく着信メロディーが途切れ、留守電へと切り替わる。

『あつ、もしもし。ミナ・ハーカーの自伝を探しているのですが…』

合言葉……………依頼だ。ヨハンはソファで寝たまま手を伸ばし、テーブル上のアンティーク調の電話を取る。

「お早う御座います。スタンクラウド探偵事務所です」

「こ、こんばんは」

受話器の向こうの女性、声から察し四十代前半。ヨハンは上体を起こし、腕時計に目をやった。もう夜の8時を過ぎていた。

「これは失礼。もうこんな時間でしたな。何しろ昼夜逆転の生活をしておりまして……」

「お願いします。娘を助けてください」

「もしもし、落ち着いてください、マダム。具体的な説明はできませんかな？」

「娘の様子がおかしいのです。娘は、今まで学校を休んだり、夜遊びなんてする子じゃなかったのですが、最近夜遊びをくり返すようになって、今週は学校にも全く行かなくなってしまいました。今朝、娘の部屋に行ったら、表情もうつろなまま、左手の手首には小さな刺青まで……」

依頼主は不安をぶちまける様に一気に喋ると、受話器越しに泣き出した。ヨハンは依頼者を不憫に思いつたが、その様なケースは探偵ではなく福祉関係の専門家に依頼するのが良いと説明した。そして、自分の知り合いに若者の社会復帰プログラムを専門に取り扱う『レンタルお姉さん』事業をしている者がいるから、その女性を紹介しようとして伝え、受話器を置いた。

泉から桂へと続く夜道。彼女は漆黒のDN-01を走らせていた。緩やかなカーブに差し掛かる手前の並木道、木々の間から見える月

がキレイ。

（やっぱりホンダのバイクは最高ね。性能も申し分ないし、流れるようなデザインもステキ）

彼女はヘルメットを脱いでお気に入りの黒い長髪をなびかせたい欲望をグツと抑えた。疾走する爽快感に身を任せながら、これから伺う依頼主の娘の事が気になる。吸血鬼が人間を餌付けして利用するのはよくある話だ。ニュースで報道される凶悪事件の件数は、昔からさほど増えてはいないし、その裏に潜む者たちの数もそんなに変わっていない。ただ、情報のスピードが速くなっただけの事。情報は武器にもなり、致命的な痛手ともなる。彼女達のような稼業をしている者たちには、後者の方が圧倒的に多いのだが。

（もう直ぐ依頼者の家に着くわね。手首のタトゥーがただの遊びならいいけど……）

程なく彼女は郊外の住宅地の中に目的の家を見つけた。バイクのエンジンを切り、ゆっくりとヘルメットを脱ぐ。長くしなやかな黒髪が風になびいて、月の光に応えるよう艶やかに輝いた。

### 【咲月】

ヨハンから貰ったアドレス通りの表札を確認すると、インターホンを鳴らして髪を整えた。

『はい』

「先ほどお電話を差し上げた、袖川悠里です」

程なくして玄関が開き、依頼者と思われる女性が現れた。彼女は悠里の顔を見るとさすがな表情で深々と頭を下げた。母親の表情に憔悴の色を感じた悠里は、気遣いの言葉をかけると早速依頼内容の確認を切り出した。

保護対象の女の子の名前は咲月ミカ。市内の公立高校に通う十七歳。先週金曜の夜から翌朝に掛けて外出。その後、朝帰りを繰り返して、その度に、様子がおかしくなっていると事だった。ヨハンが話していた内容と同じ。仕事に取り掛かる為には、まずタトゥーを確認しなければ。

悠里は早速ミカに会わせてもらうことにした。彼女の部屋は二階の角部屋。母親に連れられて中に入ると、夜だというのに部屋の明かりは消されたままで、開け放たれた窓から差し込んでくる月明かりが室内をぼんやりと映し出していた。

「ミカちゃん？」

母親が名前を呼んで電気を点ける。明るくなった部屋には、大切に掛けてある高校のブレザーや机の上の教科書とファッション雑誌。壁には元日本代表だった地元サッカーチームの選手のサインとスタジアムでのツーショット写真があった。その他ネコの木彫りのバリ雑貨とアロマキャンドルなど、特に目新しくも無い今時の女子高生の部屋で、夜遊びをするような浮いた感じの雰囲気を感じることはなかった。

ただひとつ奇異なもの、それは、窓際の椅子に力なくもたれ掛かり、夜風を浴びながら外を向いているショートヘアーの女の子。彼女は母親と悠里が入ってきた事や電気がついた事など、まるで感心が無いかのようにピクリともしなかった。眼は開いていながら生氣を亡くしているかのようで、視線は小刻みに震えていた。

「すみません。少しだけミカさんと二人きりにして頂いても構わな

いのですか？」

悠里の提案に不安げな表情をしながらも母親は「わかりました」と部屋を出て行った。悠里は彼女の体温が一階へと離れて行くのを感じた。

「ミカさん、聞こえる？」

案の定、悠里の呼びかけにミカは応じない。悠里はゆっくりと彼女の左手を取り、手首を返した。

銀のバラと、それを取り囲むように描かれた四つの流炎。嫌な予感によく当たる。悠里は今回の依頼はタフな戦いになりそうだと確信した。小さくため息をつくともう一度ミカに声をかけた。今度は声ではなく、テレパシーを使って彼女の脳へ直接語りかけた。

（ミカさん？ アナタ、ヴァンパイアと接触があったようね）

ミカの定まらなかつた視点がピタリと止まった。

（分かっているかも知れないけれど、これからの質問には絶対に声を出さないで。血を分かち合ったアナタの声は、彼がどんなに離れていても、彼の耳に届いてしまうから。私が来ていることが彼に知られてしまったら、アナタを助けるのが困難になるの、分かったわね）

突然の確信をついた問いかけに驚いて顔を上げる少女。長い前髪の間から力のある目が悠里を見上げた。さつきとは違う生気のある大きな瞳。大分消耗しているように見受けられる。彼女なりに戦っているようだが、早く助けてあげなければ手遅れになってしまうところだ。ミカがあと数回奴らと接触していたら、もう彼女は完全

に彼らの下僕となっていたら。思考回路を完全に破壊され、血の奴隷として洗脳される。彼女はまさにその直前の状態であった。悠里は優しくミカの肩に触れ、再びテレパシーを使う。

（今は辛いかもしれないけれど、もう大丈夫よ。アタシが必ず助けてあげる）

戸惑いながらも小さく頷く彼女。アタシは部屋のテレビのスイッチを入れ、リモコンを彼女に手渡す。

（幾つか質問をするけど、『はい』の時は一チャンネル、『いいえ』の時は五チャンネル、分からない場合は十二チャンネルをかけてね。OK？ 始めるわよ）

ヴァンパイアは血を吸って感染させた人間の感覚を感じ取る事ができる場合がある。そのヴァンパイアの血の強さや、対象との距離にもよるが、今は口頭でのやり取りは危険だ。悠里は直接ミカの脳に声を送った。悠里のテレパシーに動じないミカ。やはり今回の相手もテレパシーでミカを呼び出している。

（最初に血を吸われたのは先週の金曜日？）

一チャンネル。

（彼は突然この部屋に現れたの？）

一チャンネル。

（その人に以前会った事は？）

五チャンネル。

(彼の顔を見た?)

十二チャンネル。

(顔は思い出せないのね?)

一チャンネル。

(その後、彼に呼ばれたの二回以内?)

五チャンネル。

(その度に彼に血を吸われて、彼の血を吸った。)

一チャンネル。

普通なら思い出しただけでもパニックになりそうなおぞましい事なのに、泣きもせずに淡々と答えるミカ。

(彼の他には誰かいた?)

五チャンネル。

(ありがとう。大体の事は分かったわ。アタシの読みでは、彼が来るのは木曜日ね)

悠里は彼女を抱きしめると、ミカは肩を震わせて泣き始めた。

(大丈夫。もう何も心配しなくて良いからね)

ヴァンパイアが人間を襲う動機は二つ。餌とするか、下僕とするか。餌とする目的ならば、彼女はもう生きてはいないはず。血を吸いつくした後、偶発的な事故と見せかけて処分されていたろう。今回のように何度も接触を重ねて少しずつ自分の血を彼女に与えているのは、ヴァンパイアが下僕を召抱えるつ時のやり方のひとつだ。餌とする人間の部屋にわざわざ現れる様な事も、格式を重んじる彼らの手口ではなかった。

(今晚は朝までここにいてあげるから、ゆっくりお休みなさい。口々に寝て無いんでしょ?)

悠里はミカをベッドへ連れて行くと優しく寝かしつける。ミカは悠里にすべてを打ち明けた安心感からか涙が止まらず、悠里の手を握り締め、声を殺していつまでも泣き続けた。

明け方。

開け放たれた窓の向こう。ゆっくりと空が白んでくる。やわらかに吹き込んでくる風はまだ冷たかったが、それでも悠里には朝の匂いを感じる事ができた。

泣き疲れたミカがベッドで寝ている。悠里は窓際の椅子に座りヨハンへメールを送った。

(今回の被害者の体にはロキアのクランタトゥー。ターゲットは単独と思われず。次回の接触は今日の夜と予測できます。日中は学校へ行かせたいので、レヴィンの援護を要請します)

【クラン】とは氏族の事。ヴァンパイア達の血で繋がった派閥み

たいなものだ。各クランにはマスターがいて、彼らは既に十数世紀も生き、【純血】と呼ばれている。闇世界でさえ伝説の存在とされ、彼らがどうやってこの世に堕ちて来たのか、その姿も能力も全てが謎に包まれている。確実なのは、出会ってしまったら即死ということくらいだ。

マスターの配下には、彼らによって創られた上位吸血鬼たち、【貴族】と呼ばれるメンバーがいる。この貴族達が勢力争いの中心だ。【貴族】の下には【騎士】がいて、【騎士】と【貴族】は自分達の意味で、人間をヴァンパイアにして下僕にする事が許されている。下僕たちは単なる操り人間で、他人の血を吸って相手をヴァンパイアにする力は持つておらず、殺してしまうか、運よく死ななくても、免疫が弱まり病死か廃人になるだけだ。ミカはロキアというクランの下僕にされる寸前であった。

翌朝。

お姉さんが付いていてくれるなら大丈夫と、昨日とは別人のようにスタスタ家を出て行くミカ。感激した母親から、涙まみれの握手と賛辞を頂いく悠里。

「お母様が、ミカちゃんの症状が軽いうちに連絡してくださったので助かりました。また今晚もお伺いします」

などと、あくまでも『レンタルお姉さん』として振る舞い、悠里はミカの後を追う。ミカは気丈にも、両親には普通の夜遊びに手を出しただけだと思わせたいと悠里に提案してきた。悠里という希望をもたらした存在と出会った事で、彼女本来の心の強さを取り戻した様に悠里は感じた。

彼女の上空には青い毛並みのオオルリがパタパタと羽ばたいている。彼がレヴィン。人間の姿に戻らなければ最高にいいヤツなのに

と悠里は空を見上げた。早朝、オオルリの姿でミカの部屋へ現れたレヴィンは、突然人間に戻ってミカを大いに驚かせた。銀色がかった青い長髪を完璧に逆立てた姿は誰が見ても飽きれる程にパンクだった。

日中は学校周辺を悠里が、校内をオオルリが警戒して回ったが、特に異変は無かった。校内に怪しい血の臭いも無く。平穩に一日が過ぎていく。昼間は動かない様子を見る限り、今夜の御相手は、貴族か騎士という事になりそうだ。

その夜。悠里とレヴィンはあえてミカを外へ連れ出す作戦にでた。住宅地では色々と不都合な事が多く、他人を巻き込む事は絶対に許されない。これが最後の夜間外出になる事を祈りつつ、バイクにミカを乗せこっそりと家を抜け出す。夜間外出を気に掛けていたご家族には申し訳ないが、明日の朝まで無事に帰ってこれれば万事OKだ。

郊外からバイパスへ抜けてバイクを南へと走らせる。交通量が多い道は比較的安全だ。一撃で仕留められる相手を、『事故と見せかけて抹殺する』場合は別として、色々と証拠が残されてしまいそうな場所での接触は、どのクランのヴァンパイアも半吸血鬼のハンター達も好まない。彼らは敵対しながらも、そういう意味では共通の掟の中で戦わざるをえないのだ。悠里はバイクのスピードを上げ、彼らの気配を探り始めた。

悠里達のような半吸血鬼でも、感覚を限界まで研ぎ澄ませば数キロ先の様子を感知できる。こういったコソコソした事はレヴィンの得意技だ。その彼は今、オオルリの姿になって上空から悠里達に近づいてくるであろう気配に感覚を飛ばしている。

ヴァンパイアはミカの血の臭いを頼りに悠里達を追ってくる筈だ。

ミカとその主人である吸血鬼は儀式の中で互いの血を入れ替えているので、容易に位置を把握する事ができると考えて間違いない。手なすけようとしていた獲物が失踪したと気がついたら、彼の怒りも収まらないだろう。消息の跡を辿って絶対に後を追ってくる。悠里とレヴィンはそう確信していた。

三十分程走らせたところで、レヴィンからの声が届く。

（来るぞ、北からもの凄い速さで追って来る。独り、間違いなく騎士だ！気を付けるよ、悠里）

悠里のバイクは脇道へと曲がり、猛スピードで迫ってくる闇の住人とやり合うのに手頃な場所を目指す。彼女の頭にはこの辺の地理は完璧にインプットしており、ヤツが追いついてくる前に住宅地を抜け、郊外の開けた一本道へ出る。

『……！』

殺意！ 悠里はアクセルをフルスロットルのまま両足でアスファルトを蹴り、バイクごと垂直に跳んで、間一髪で影の突撃をやり過ぎす。ジャンプしたバイクの下を物凄い勢いで何かが通り抜ける。

着地すると同時に後輪でスリップ痕を描きながらターン。再びアクセル全開で走り出すと、バイク本体にしっかりと掴まる様ミカに叫ぶ。ミカは恐怖と戦いながらも、しっかりと身を屈める。ヴァンパイアの呼びかけの性で意識が朦朧とする度に頭を振って持ちこたえていた。悠里はミカが振り落とされないように、しがみついてくる彼女の腕を片手で力強く押さえつけた。

（レヴィン、運転をお願い。ミカを遠くへ！）

悠里は追いついてきたレヴィンへ声を飛ばしバイクから道路へ跳

躍した。

運転手を失ったまま疾走するバイクにすぐさまオオルリが舞い降り、ハンドルを握るパンクロッカーへと姿を変えた。意識を失いかけて、バランスを崩したミカをしっかりと後ろから抱き抱えて、レヴィンはバイクを疾走させ、ヴァンパイアからミカを引き離しにかかった。

滑り込むように着地した悠里は、立ち上がりながらレザージャケットの内側からシルバーの短銃を取り出し、迫ってくる影に向かって数発撃ち込む。

当てるつもりは無く、突撃してくる相手の軌道を変える為の発砲。その隙に左手にはめた指輪のヘッドのから、銀色の粉をアスファルトに撒き散らす。

ヴァンパイアが間近に迫ってくるタイミングを見計らい、ZIPPOに火を点け地面に投げた。

突然燃え上がる青白い炎。闇の生物が触れれば即灰になる銀の炎だ。

闇の騎士は攻撃のために鬼化していた身体の足爪をアスファルトに食い込ませるように叩きつけると、辛うじて炎の前で止まった。炎に照らされるヴァンパイア。悪魔の様に裂けた口から剥き出しになった太くて鋭い牙が光り、耳は異様に長く伸びていた。半分抜け落ちた白い長髪の奥には猫のような瞳孔と、それを取り囲む瞳が赤く輝いていた。背中にはうぶ毛が生えた蝙蝠のような翼がはえていて、青白く硬い皮膚と長い爪が冷気を放っている。

「下品ね。流行って言葉を知らないのかしら？」

悠里の挑発に汽笛のような叫び声で応じる魔物。

瞬時に後ろへ回り込む妖魔の攻撃を悠里は跳躍でかわす。着地し

て態勢を立て直そうとする彼女は、再び強く打ち込まれた打撃で後ろに弾き飛ばされた。彼女の胸に強烈な痛みが込み上げ、アスファルトの上に転がった。

（速さだけじゃないよね。アバラが折れたみたい。何発も当たってられないわ）

悠里は悔しさのあまり右の拳でガンガンとアスファルトを叩いた。彼女の中で眠る吸血鬼の血が目覚め、闘争本能が剥き出しになる。覚醒した彼女の黒髪は赤みを帯びて薄らと輝き、瞳もまた赤く染まった。好戦的に微笑む口元からは長い牙が垣間見える。悠里は右手の中指にはめていたバラを模った指輪を外すと、苛立たしげにアスファルトへ叩きつけた。真つ二つに割れた指輪を更にブーツで踏みつけ、粉々に砕く。アスファルトを焦がした青い炎の熱い煙、刺激臭が立ち込めていた。

仕切り直しとばかりに、悠里は苛立ちを隠しもせず雄たけびを上げる。

悠里の怒りに吸い寄せられるように突進してくるヴァンパイア目掛け、悠里もまた突撃し飛掛る。血の力を【速さ】に集中させ相手の動きを翻弄し振り回す。幾度攻撃を繰出しても当たらない悠里の身かわしに苛ついたヴァンパイアは、彼女を一撃で仕留めようと振りを大きく攻め始めた。

悠里は相手の一撃をかわして吸血鬼の足を掴むと、血の力を【速さ】から【力】にギアをシフトチェンジした。悠里は細い身体からは想像もできない程の怪力で吸血鬼を空へ放り投げ、再び【力】から【速さ】へと血を流し込んで跳躍する。空中で吸血鬼に追いつくと、妖魔の背中、蝙蝠の様な歪な羽根の背後へと回りこんで、優雅に首筋へ噛み付いた。妖魔はギャーギャーと叫び声を上げながらもがき、悠里と共にきり揉みになって道路に落下した。周囲のアスフ

アルトには粉々になったバラの指輪が光る。

悠里は口から鮮血を滴らせながら馬乗りになると、獲物の額を掴みアスファルトに抑えつけた。小首を傾げて妖しくほくそ笑むと、ブーツで思い切り地面を擦った。バチバチという発火音と共にアスファルトに散らばった指輪の粉が燃え上がり、彼女と吸血鬼を包み込む。

吸血鬼の憎しみに満ちた眼差し。彼はもがいて抵抗を試みるも、奪われた血液の量が多すぎて、力が入らなかつた。皮膚が焼け、みるみる内に吸血鬼は赤く腫れ上がり、黒ずんでいく。悠里は自分の皮膚の焼ける臭いを嗅ぎ、髪の毛がチリチリと焦げてゆく感覚に酔いしれた。

灰色に朽ちて行く闇の生き物の残骸。悠里はそれを、戦いの興奮と苛立ちを鎮めようとするかのようにしばらく眺めていた。すつかり灰となった妖魔の亡骸を置き去りにして、悠里は立ち上がった。

ボロボロに破れたジャケットに付いた埃を払いながら、近づいてくるバイクのライトに照らされる悠里。相手の血を飲んだお陰で、皮膚と髪は元通りになり、口から滴っていた鮮血の跡も消えていた。

「あはは。イイ女が台無しだな」

戦闘の高揚が収まらない悠里はレヴィンの軽口を完全に無視し、ミカを抱きしめてバイクから降ろす。

「終わったわ。もう大丈夫よ」

髪を優しく撫でてあげると、ミカの瞳は初めて安心の色を見せる。感染した被害者が本当に大変なのはこれからなのだが、今日はゆっくりと休ませてあげたいと悠里は思った。

「よく頑張ったわね。お家へ帰りましょう」

悠里はパンク男の前を無言で通り過ぎると、家を抜け出した時と同じように自分のヘルメットをミカに被せバイクに跨る。ミカが後ろから抱き着いてくるのを確認すると、髪がなびいて風を感じられるように、自慢の黒髪をかき上げた。そして、静にゆれる風を感じつつ悠里はゆっくりとアクセルを回した。

「やれやれ。お淑やかなのかドSなのか、気難しいお姫様だぜ」

一人取り残されたレヴィンはそう言うと、アスファルトを蹴ってバク転をした。

着地するはずの彼の姿は無く、ハタハタと羽音を響かせて、一羽のオオルリが夜空を舞い上がって行った。

## 第2夜 この世界に堕ちて(1)

「冷蔵庫??」

戸惑うミカを面白がって、汁っ気たっぷりのローストビーフをつまみながらレヴィンがニタつく。

ここは、カフェバー・アルバトロスのキッチン。

先日の事件で吸血鬼に噛まれたミカは、抗体を飲んで廃人になるのを防ぐ為に彼らのアジトへ連れて来られていた。

「まったく。ミカがこんなに大変な時に、どうしてそんな風にふざけていられるのかしら」

相変わらずヘラヘラが止まらないレヴィンを悠里がにらみつける。

「さっ！ 行きましょう」

悠里はミカの手をとって、キッチンの端にある業務用冷蔵庫の扉を上げると中へと消えていった。レヴィンが二人の後を追おうとすると、それに気が付いた悠里が後ろを振り向いて

「アンタはいいから店番してて!!」

そういつて牙を剥いて見せた。

「はいはい。言われなくてもそうしますよ。フン!!」

レヴィンは恨めしそうに冷蔵庫の扉を閉めると、調理台に置いて

あつた赤い飲み物を一気に飲んで店内へと消えて行つた。

冷蔵庫の扉の奥には何重もの扉があり、複雑に入組んでいた。扉に突き当たるたびに悠里はそれに手を当てたり瞳を読ませたりしながら進んでいった。彼女の行動を興味深げに覗いていたミカが言った。

「なんだか秘密基地みたいですね」

悠里はピツつと音を鳴らして開いた扉を開けながら答えた。

「そうね。『秘密基地みたい』ね」

悠里の返した『みたい』の言葉は意味深に響いたが、ミカはそれには気が付かなかつた。

二人がやってきた部屋は、清潔に保たれた病院の診察室のような部屋だつた。中では一人の中年紳士が試験管に青い溶液を注いでいる最中だつた。彼は白髪混じりの白人で、イギリス映画のスクリーンから出てきたロンドン紳士そのものだつた。ただ、彼の血色の悪そうな白い肌はミカに何となく違和感を感じさせた。

男はミカの方を振り向いて、優しく微笑んだ。

「やあ。君がミカさんだね」

彼はそういつて、奥にある革張りのソファアに腰掛けるよう、品良くミカにジエスチャーをした。

ミカと悠里がソファアに腰掛けると、男は目の前のテーブルに先ほど注いでいた青い溶液と赤い溶液が入った金のアンティーク調に飾られた試験管立てを置いて、向かい側のソファアに腰をおろした。

「私はヨハン・スタングラウド。君のお母さんから依頼を受けて悠里を派遣したのは私だ。今回は大変な目に遭ってしまったね。辛かっただろう」

「はい。でも、悠里さんやレヴィンさんのお陰で今はもう大丈夫です」

そう言ってミカは悠里に微笑んだ。

「彼はこの施設の主で、私やレヴィンのボスなのよ」

悠里はそういってミカの手を握ってあげる。

「さあ、早速だが、咲月ミカさん。事件の終わりは至ってシンプルだ。この二つの溶液を飲んでしまえば全てが終わる。吸血鬼に噛まれた人間を治療するには非常に長い時間と、辛い後遺症を伴うのが常だったが、今回君に処方するのは素晴らしい新薬なのだよ」

「新薬……ですか……」

「そう、この赤い薬で、君の血は完全に除菌され、吸血鬼の感染から開放される。そして、こちらの青い薬で、君の頭と心の中からおぞましい記憶だけを消し去る事ができるのさ」

あっけにとられているミカ。ヨハンが更に説明を続ける。

「心配ない。吸血鬼に襲われたこと自体忘れてしまふのだから。その手首のタトゥーも血が浄化されれば数時間で消えて無くなる」

「は……はぁ」

ミカの手を握っていた悠里が彼女を勇気づける。

「大丈夫よ。全てを忘れて、何も無かったかのように、アナタの部屋で目が覚めるわよ」

「悠里さん達のことも？」

「そう、だから飲む前にさよならを言わなきゃね」

「そう………なんですか………」

ミカは寂しそうにうつむいた。

## 第2夜 この世界に墮ちて(2)

「あの……私、忘れたくありません」

ミカは、目の前に置かれた二つの試験管をしばし見つめた。

おぞましいヴァンパイアの誘惑と吸血。甘美な血の味と香り。それらは今思い出しても足がすくんでしまうような恐ろしい記憶だったが、その中にもミカはひとつの光を見つけていた。それは暗闇の中から自分を救ってくれた悠里の存在だった。

彼女は今まで自分が普通に暮らしてきたこの街の隠された暗がりの中で、人類を守るために闘い続けている。その事実を目の当たりにしながら、それに封をして何事もなかったかのように以前の生活に戻る事が正しい選択とは思えなかった。

被害者として落とされたこの世界、救い出されて、そのまま退場してしまって良いのだろうか。自分も悠里達のように救う側の存在として生きてみたい。ミカの心には使命感にも似た感情が芽生え始めていた。

「確かに凄く怖かったけど、これが私の身に実際に起こった事実なら、ただ忘れれば良いとは思いません。それに命を救ってくれた悠里さんの事も、忘れたくありません」

「しかし咲月さん。この二つの薬はどちらか一つだけを飲むという事はできない。赤い薬だけでは体内の血は浄化する事はできても、君の本能の記憶から、血を求める喉の乾きを取り除く事はできないのだよ」

ヨハンは顎の下の無精ひげを弄りながらそう言った。

通常の被害者に対してはこんな場は設けず、気付かれること無く

薬を飲ませ以前の平穏な日常へ帰してあげるのが常だった。被害者を昏睡させ、裏世界で提携している病院へと搬送する。そこから、突発的な発作で意識を失くしたという事で処理され、表社会へと帰ったいくのだ。しかし今回、ヨハンは目の前にいる少女に対しては、なんとなく感じるものがあった。

「まあ、私の診断では君が吸血鬼の毒によって死亡するにはあと三十九時間程の猶予がある。色んな事が突然起こったから感情的になるのも仕方がないが、よく考えることだ。人間に戻らなければ半ヴァンパイアとして生きていかなければならない。私達は半ヴァンパイアの事を【ヴァマイラ】と呼んでいる。ヴァマイラは単独では生きていけないし、ヴァンパイア達の第一の標的とされる。戦術を身に付けなければ虫のように殺されてしまうだけだ。私は全てを忘れて人間として生きてゆくことをお勧めするがね。まあ、今晩はレヴィンに家まで送らせるから、明日また、ここへ来るといい」

ヨハンはそう言って立ち上がると、2つの溶液を冷蔵ケースへしまった。

二十分後。

ミカはレヴィンが運転する黒のワンボックスに乗っていた。悠里は別の仕事が入ってしまい、同乗はしていなかった。

「レヴィンさんと悠里さん、ホントに仲が悪いんですね」

ミカのストレートな発言にガツカリしながらも、レヴィンはにっこりと答えた。

「まあ、そうかもな」

「そうかもな、ですか？」

「なかなかね、心を開いてくれないんだよね。オレと悠里はさ、随分と長い間一緒に戦ってきた仲間だけど、出会った時からあいつの心はずっと閉ざされたままなのさ。あ、タバコ吸ってもいい？」

「どうぞ」

運転席のウィンドウを開けレヴィンがタバコを吸い始める。

「昔、一人の花嫁さんが吸血鬼に襲われて発見された事件があつたね。純白のウエディングドレスが真っ赤に染まって凄惨だったよ。彼女は瀕死の重傷だったが、ヨハンさんの施術で何とか一命はとりとめた。でも、問題はその吸血鬼だったんだ。教会から忽然と姿を消した花嫁のフィアンセが犯人だったわけだが、その後のヤツの足取りは掴めず、オレとヨハンさんは追跡を諦めざるをえなかった」

「吸血鬼って教会には入って来れないんじゃないの？」

「あはは、そんなのは映画だけの話だよ。首から十字架をぶら下げた吸血鬼なんてのは世の中に腐るほどいる。やつらは、キリスト教よりも長い歴史をもってるからな。話を戻そう。ヨハンさんは治療の最後、花嫁に薬を飲ませる前に聞いたんだ。この薬飲めば、明日から血に飢える事も無く、普通に人間として暮らしていける事。でも、それと同時に、愛した人の事も永遠に記憶から無くなってしまっただけの事だね」

レヴィンはタバコを吸いこむと、車外へ向かってゆっくりと煙を吐き出した。

「でも、彼女は心からフィアンセの事を愛していた。だから、人間には戻らず半吸血鬼であるヴァマイラとなって、消えた花婿を探す道を選んだ。どんなおぞましい結末なるかも分からんつてのに、忘れる方が辛かったんだろっな」

「悠里さんにそんな過去があつたなんて」

「まあ、明日の朝になれば、今の話もおレ達の事も、ミカちゃんは忘れちゃっからな」

「あ、レヴィンさん聞いてないんですか？」

「え？」

「私まだ、薬飲んでませんよ」

「へ？」

「全てが無かつたかのように記憶が消えてしまつて言うのが、現実から逃げてるような気がして、私、薬を飲めなかつたんです。」

「ウソ！！ ああ……余計な事をべらべら喋つてまた悠……里に睨まれそうだな」

会話の途中でレヴィンは血の臭いを感じた。進行方向の三キロメートル先、四体いる。

「あつ、この感じっ……！」

助手席にいるミカが思わず叫んだ。

「どうしたミカ」

「吸血鬼がいる。ずっと前の方から感じるよ。一人じゃないみたい」

レヴィンはミカの潜在能力に驚いた。ただ感染しただけの人間ならミカのような感応は無い。ミカの言葉から察して、自分と同じように感じていることは明らかだ。人間に戻すにはもったいないセンスだ。

「ちょっと寄り道してかえるぞ、ミカ」

レヴィンは一気にアクセルを踏み込んだ。

## 第2夜 この世界に堕ちて(3)

レヴィンはカーナビのTVをつけた。モニターには地元サッカークラブのナイトゲームの中継画像が映し出される。

「よし！」

「よし！ 勝ってる！！！」

二人が同時に声を上げる。今日は仙台対川崎のナイトゲーム。コアな仙台サポーターの二人には、ごく当たり前の条件反射だった。気まずそうに一瞥を交わした二人は、モニターを食い入るように見つめた。今は前半三十二分。

二対一で仙台のリード。

ヴァンパイアの血液反応はこのスタジアムからだ。レヴィンは画面に映る群衆に目を凝らした。

「この中に奴らがいる。数は四人。観客か、選手か、スタッフか……」

「そんな、選手って事もあるんですか？」

「まあ、ここで何かをやらかそうとするならば怪しまれない方がいい。つまり、観客の視線を浴びる選手である可能性は低い。ただ、確率はゼロじゃない」

ボールがラインを割り、そのタイミングで川崎の選手交替がはいる。TV画面には試合が止まった間も応援を続けるサポーター達が映る。

「コイツだ!!」

引きぎみの画面に映った観客の中に、奇妙なプラカードを持った二人組みがいた。

【復讐するは、我にあり】

実況のアナウンサーもその二人に気がついて、コメントをする。

『お、川崎のサポーターの中に【復讐するは、我にあり】なんてプラカードを掲げている人がいます。オドロオドロしいですね。前回の対戦で仙台に大差で敗れた川崎。翌日の監督更迭と、その後の六連敗が今期の低迷につながって、現在では熾烈な降格争いに甘んじている川崎です』

「ホントにそんな意味なら、こっちだってありがたいんだがな」

レヴィンは運転席側のサンバイザーを下ろした。内側にはモニターとキーボードが設置してあり、いつでも本部にアクセスできるようになっていて。彼は両手をハンドルから離して三秒間、もの凄いスピードでキーを叩き、ボタンっとサンバイザーを閉じた。

「悠里の仕事が速く片付くといいんだが……」

レヴィンが見つめる先にスタジアムが見えてきた。二人を乗せた車は猛スピードで橋を渡ってスタジアムへ到着。近くのファミレスに駐車する。

「ミカ、お前は店に入って絶対に動くな。それと、奴ら四人の動き、

感じるか？」

「はい」

「いい子だ。店の中では奴らも易々と手は出せないはずだからな。それと、」

レヴィンは車のダッシュボードから、銀の万年筆を取り出して、ミカに渡した。

「これはもしもの時用に渡しておく。このペンで刺せば奴らを始末できるし、中のインクは聖水だから、吸血鬼が触れれば大火傷ものだ。ただし、絶対に人には見られるなよ。一応は殺人罪だからな」

ミカは両手でしつかりと万年筆を握り締め黙って頷いた。そして自分の戦場になるかもしれないファミレスを鋭く見つめる。店内は家族や友人達との食事を楽しむ人々で賑わっていた。

ミカはもしもの時、あの人たちを巻き込まずにうまく立ち回れるだろうか考えた。でも、最悪の場合は自分が犠牲になればいい。誰かが死ぬのをただ見てるよりは、殺人罪を被る方がマシな選択なんだろうと思った。

「上出来だ。そういう目、嫌いじゃないぜ。ただ、お前が刺したヤツが灰になって消えちまうのを見られたら、殺人どころの騒ぎじゃないからな。あくまでも奥の手、最後の最後の奥の手だ。いいいな？」

そう言ってレヴィンはミカの肩を叩いて笑った。そして、ポケットからプラスチックのケースを取り出すと、ケースの中から赤い錠剤を取り出して飲み込んだ。レヴィンの喉がゴクリと鳴る。苦い顔

をしながら彼はケースをミカに渡した。

「お前も人ごみの中じゃ喉が乾くだろっからな。水もらって飲んどけ」

「はい」

無言のまま頷きあった後、レヴィンが車のエンジンを切ると同時に二人はドアを開け別々の方向へ走り出した。

ミカは店内の禁煙席へ案内されると、ドリンクバーをオーダーした。「ドリンクバーだけ？」と言いたげな顔の女店員がメニューを下げるその手首に自然と視線が行く。

うつすらと浮かび上がる血管が目に入った時、ミカは強烈な喉の渴きを感じた。

『ドクツ……ドクツ……』

心臓の鼓動が鳴る。温かい血液の流れるリズム。

その音が離れていく女店員の体内から聞こえるものと気付いた時、ミカは強烈な吐き気を覚えた。ミカは慌ててレヴィンからもらったケースから真っ赤な錠剤を取り出して、震える手で水で一気に流し込んだ。

それは、自分が吸血鬼だと思い知らされた瞬間だった。目を閉じて息を整え、手を口に押し当て気持ち落ち着かせる。目を閉じた所為で、近くにいる人たちの鼓動がはつきりと聞こえた。生々しい心臓の鼓動の他にも、沢山の血の香りを感じることができた。それは街中の人ごみで、香水を付け過ぎた女性とすれ違う時のような鮮

明さだった。

気を紛らわせようと壁際の大型モニターを見ると、隣のスタジオのサッカー中継が映っていた。四人のヴァンパイアに動きは無く、レヴィンの血の気配だけが高速で移動してゆくのが感じられた。

## 第2夜 この世界に堕ちて(4)

レヴィンは観客席へと続く階段を全速力で登っていた。

【復讐するは、我にあり】

(その意味が一体何を指すのか今すぐに確かめてやる)

レヴィンが目指す四体のターゲットに動きは無かった。観客席へ着きピッチへ目をやる。後半七分、得点は動かさず仙台のリード。満員の観客席からは地鳴りのような応援が鳴り響いている。レヴィンはプラカードを持ってTVに映っていた二人組の元へ急いだ。やつらも当然こちらには気づいているハズだ。

(どう出てくるつもりだ、こんな場所じゃなきや楽勝なのに)

レヴィンはすぐさまターゲットを視界に捉えた。彼らは遅れてきた友人を見つけたようにニッコリ微笑むと、川崎側のゴールを指差した。

全速力で走っていたレヴィンは足を止め、指された先を振り返る。

川崎側のゴールキック。ゴールキーパーがチームメイトに『上がれ！上がれ！』と手を大きく振ってスペースを探し、助走を付けてボールを大きく蹴り上げた。ボールは大きな弾道を描いて敵陣へと飛んでいく。選手、観客、レヴィン。すべての人が見守る中、ボールは緩やかな弧を描いて上昇し、伸びる。そして緩やかに下降を始めようとしたその瞬間、ボールから凄まじい光が弾け、スタジアムを強烈な光と爆音が包み込んだ。その衝撃は、そこにいる生き物全

ての視覚と聴覚奪うには十分な衝撃だった。

『！！』

レヴィンは、超人的な反射神経でコンクリートフェンスの影に身を隠した。間一髪、頭上を突風が突き抜ける。その時、彼は瞬間的な速さで目の前に現れたひとつの気配を感じた。

(殺られるッ！！)

レヴィンは素早い跳躍でそれをかわす。それは先ほどの二人ではない三人目の吸血鬼。レヴィンが跳躍から身体を反転し反撃の態勢を取ろうとした時、風を切って飛んでくる弾丸の音が聞こえた。レヴィンは即座にオオルリに変身し、急上昇でそれをかわした。小鳥となった彼の羽のすぐ脇を二つの弾が突き抜け、コンクリートにめり込んだ。

高速で円を描いて飛びながら、一度客席を覆う屋根の上へと逃れ人間の姿へと戻った。

爆発から約二秒。客席からは悲鳴が聞こえ、状況も把握できないまま人々は瞬時にパニックの波に飲み込まれていた。

(クソッ！ 派手な真似しやがって！！ だが、これでやつら全員を確認できたぞ。プラカードの二人、接近してきた一人。サイレンサー銃で狙撃してきた一人。爆発は光と音風だけのハツタリ物みただが、一体何が狙いなんだ)

下からの銃撃に備えて屋根の上を走りながら客席を見渡す。我先にと出口へと殺到する人々。平和慣れした日本ではあまりにも唐突過ぎる出来事だ。

客席から一羽のカラスが舞い上がり、レヴィンの前方へ十メートルの場所にとまる。カラスは彼を見つめ、不思議そうに小首をかしげ、カアカアと鳴いた。カラスはレヴィンへ二歩近づく。レヴィンは身構えたまま、カラスとの距離を保つために二歩下がった。カラスは短く一鳴きすると赤く目を光らせた。そして、黒い体が膨張してぼやけたかと思うと、人間の姿へとゆっくりと変化し始めた。

あえて、ゆっくりと変化してゆく。目の前であからさまに隙を見せつけながらも、入り込めないその空気をレヴィンは痛いほど感じた。ヒリヒリするような感覚が目の前でどんどん膨らんでゆく。誰もが一度でも体感したなら二度と忘れることができないこの感覚。レヴィンはその意味を理解せざるを得なかった。彼は貴族だ。

レヴィンは理解した。彼は先日悠里が始末した騎士の親玉だ。

一人で貴族を相手にするのは危険すぎる。何か対策を考えなければ……

目の前の男はレヴィンの思惑を見透かしたように一瞬だけ微笑んだ。漆黒のスーツの生地が皮膚の白さ一層に際立たせ、気品ある紳士をより恐ろしく感じさせた。風になびく白い髪は別の生き物のように波打ち、うっとりするようなブルーアイには慈愛すら感じる。その風格はヨハンのものに似ていたが、その内から発せられるオーラには決定的な違いがあった。ヨハンを生存在とたとえるならば、目の前の男は圧倒的に死の力を感じる存在であった。

死の貴族は無表情のまま、傾いていた首をゆっくりと直立させて目の前の獲物の方を向いた。生気の失われた瞳はレヴィンの外観に向けられているのではなく、レヴィンの存在自体を捕らえているように感じられた。

冷たい空気が二人を包む。まるで数世紀も開かされる事の無かった密室のような重い死の香りがたちこめ、レヴィンはその空気の中に、永遠に封じ込められてしまうような感覚を覚えた。無意識のう

ちに後退りをする。早く対策を考えなければ……

遠くから風の音が聞こえる。

スタジアムの照明が一つずつ消えてゆき、あたり一面を暗闇が支配してゆく。地上からはパニックに陥った人々の叫び声と鳴き声が聞こえ、2人はまるで、地獄の淵で対峙しているかのようであった。再び風が川上から流れてくる音が聞こえ、突風がスタジアムを飲み込む。激しい風の音に混ざって微かに鉄筋を蹴りつける二つの音が聞こえた。そして、次の瞬間。

もうそこには誰の姿も残ってはいなかった。

ファミレスの店内にある大型モニターが一瞬発光したかと思うと、同時に外から凄まじい音が響いてファミレスの窓ガラスが激しく震えた。

騒然となる店内、外で大変な事が起こっているのは明らかだった。店員が二人。客席からも何名かが外の様子をうかがいに外へ出る。ミカも窓越しに外を見てみると、スタジアムから大勢の人々がなだれ出てきた。スタジアムで何かが起こっている。制服の内ポケットに忍ばせていた銀の万年筆を握り締めようとした時、店内の電気が一斉に消え、暗闇に包まれた。

女性客の叫び声が響き、店内にもパニックが広がる。四方から叫び声が聞こえ、皆が一斉に出口へと向かう。皿の割れる音があちこちで聞こえ、出口へ急ぐ男達の怒号が響いた。人々が出口へと殺到するなか、ミカも店外へ出る決心をした。

(こんな暗い店内じゃ残っても意味が無い。どこか明るいうところに逃げ込まなきゃ……)

外へ出たミカは、四方へ逃げ惑う人々に流されながらレヴィンの

気配を探す。

「そんな……………」

ミカが何度も探してみても、レヴィンの気配を感じることができなかった。そして、代わりに彼女が感じとったのは、三人の吸血鬼がスタジアムから出てくるの気配だった。ミカが駅方面へ逃げる人ゴミに紛れて逃げようとしたその時、

『ミカ聞こ……………か？ 駅に逃……………の……………マズい。橋……………向かつ……………逃げる……………だ……………だ……………』

彼女の頭の中にレヴィンの声が微かに聞こえた。断続的な声だったが、ミカは声の指示に従い橋へ向かって走り出した。大勢の人々が市街地へ向かって逃げる中、何度もぶつかりながらも橋へ抜ける。一気に人波から抜け出したが、スタジアムから出てきた吸血鬼三人の気配もこちらへ迫っているのをミカは感じ取っていた。

(狙いは、私なの？)

そう直感したミカは、橋の歩道を全力で走り出した。街灯が消えた橋は、乗り捨てられた車で埋め尽くされている。追ってくる三人はぎこちなく身体を動かしながらも徐々にスピードを上げ、ミカの背後に迫った。ミカは後ろを振り向きながら走り続け、ポケットから銀の万年筆を取り出して強く握り締めた。

瞬く間に間合いをつめられ、迫り来る足音。ついに追いつかれたと悟ったミカは不意に立ち止まると、万年筆のキャップを外して振り向いた。この数日、色んな事が起こりすぎて、頭がどうにかなくなってしまったのかも、とミカは思った。こんな状況でこみ上げてくる感情は『恐怖』ではなく『苛立ち』だった。散々逃げても追いか

てくる。今日をうまく逃げ切ったとしても、また、明日も逃げる運命なんて、もうウンザリだと思った。

「どうせ、殺されるなら、戦ってやるんだから！」

そう言って、先頭を走る吸血鬼に向かって走り出した。

「きゃーーーーーッッ！！」

悲鳴のような叫び声を上げながら突進したミカは、万年筆を両手で握り締めると、吸血鬼の腹目掛けて思い切り突き出した。万年筆の尖った筆先は相手の服を突き破り皮膚に達した。ズブリと入った人を刺す感触に驚いたミカは、思わず万年筆を掴んでいた手を放した。

吸血鬼は、追っていた獲物の急な反撃に対応することが出来ず、そのまま崩れ落ちた、自分の腹に突き刺さった万年筆を両手で掴み、力づくで抜こうとしながら膝を突いたその時、自分の膝が灰となって朽ち果てていた事に気が付いた。『身体が焼けるように熱い。』その感触を感じるまもなく彼は灰になって消えた。

銀の万年筆はカランツツと乾いた音を鳴らして地面に落ちる。ミカが我に返ると後の二人がすぐそこまで迫っていた。落ちた万年筆を拾っている時間は無かった。

( どうしよう…… )

すぐさま全速力で逃げ出したミカ。その時、ミカの前方からエンジン音が聞こえた。一台のバイクが橋の細い手すりの上を、もの凄い速さで迫ってきた。

挟まれた！ 一瞬そう思い足を止めたミカ。しかしそのバイクに

は見覚えがあった。

「悠里さん!!」

ミカは悠里のバイクを指して再び走りだした。

「ミカ！ 伏せて!!」

悠里は黒のフルフェイスを脱ぎ捨てるとサイレンサー付きのピストルを構えた。咄嗟にミカが突っ伏すように身を屈め、その上を銃弾が飛ぶ。

悠里が放った弾丸は二人の吸血鬼を一瞬で灰にしてしまった。彼女はそのまま急ブレーキを掛けながらバイクごと歩道に着地すると、バイクから降りて銀の万年筆を拾い上げた。そして、悠里は数秒夜空を見上げていたかと思うと、レヴィンの万年筆を空高く投げた。停電の暗闇の中で輝く万年筆は、上空で何かに掴まれて、もの凄い勢いで川上へ飛び去っていった。

「ミカ、レヴィンの後を追いましょう。急がないと、彼も危ないわ」

二人はバイクに跨ると、暗闇の中をライトも点けずに走り出した。

## 第2夜 ハヤブサと霧吹き

三分前

暗闇の中を飛ぶ二つの影。

追われる影は傷付き、追う影は全くの無傷だった。

レヴィンは、急激に高度を変えて逃げ回るのが精一杯だったが、それもあまり持ちそうになかった。

(クソ……あと数分が限界だな)

レヴィンは、ハヤブサの姿に形を変えて貴族の追撃をかわし続けていた。彼ら半吸血鬼のハンター達は、血を吸って殺害した動物に姿を変えて空を飛ぶことは可能でも、吸血鬼のように人間の姿のまま空を飛ぶ妖術を身に付ける事はできない。空での戦闘は圧倒的に不利だったが、地上戦では瞬時に消されるのは目に見えていた。彼は空を逃げ回って時間を稼ぐ戦法を取っていたが、貴族の執拗な追撃で傷付き、激しく消耗していた。

地上の混乱はまだ収まってはいないようだ。ファミレスから出てきたミカの血を感じる。

レヴィンはミカが自分を探している事に気が付いたが、今はそれどころではなかった。スタジアムにいた残り三人の手下達も、ミカを捕獲する為にスタジアムから出てきた。ミカの身にも危険が迫っている。ミカが奴らの追跡に気が付いている事を祈るしかなかった。

レヴィンは考えた。

奴らはミカの吸血鬼としてのセンスに気が付いているはずだ。

吸血鬼にもいわゆる才能のようなものが有り、全ての吸血鬼が同じように姿を変え闇の力を使いこなせる訳ではない。怪力を武器として戦う者もいれば、速さを活かして戦う者もいる。実質的な戦闘能力以外でも、姿を変える才能や他人を操る術など、様々な能力があり、吸血鬼や【ヴァマイラ】と呼ばれる半吸血鬼の中にはその複数の分野で圧倒的に秀でた才能を持ち合わせている者もいるのだ。見込みのある人間を自分達のクランに取り込もうとするのは当然だ。

（オレ達はミカを奪い返すためにワザワザ誘い出されたってワケか。だったらなおさらミカを奴らに渡す訳にはいかなかったぜ。しかし、ミカを治療して人間に戻したとしても、また襲われるのは目に見えているな）

レヴィンは悠里が猛スピードで接近しているのを感じ取った。ミカを悠里の向かっている方へ誘導しなくては。

『ミカ、聞こえるか？ 駅へ逃げるのはマズい。橋へ向かって逃げるんだ！！』

レヴィンはミカが聞き取ってくれる事を願ってテレパシーを送った。ミカの気配が橋へ向かって動き出した。あとは悠里がうまく処理してくれるだろう。

ハヤブサ姿のレヴィンは一気に上昇すると人間の姿に戻り、下から追って来る吸血貴族に向かってピストルの全弾丸を連射した。レヴィンはこれで全ての武器を使い果たしてしまったが、そのささやかな挑発は功を奏し、吸血鬼は牙を剥き出しにして襲い掛かってくる。相手の攻撃をギリギリのところかわすと、レヴィンは再びハヤブサの姿に戻り、急降下し始めた。

(その調子だ、オレだけに喰らい付いてきやがれ!!)

ハヤブサの降下速度は時速三百キロメートルにも達するが、レヴィンは血の力を加えてさらに加速することが出来た。吸血鬼を十分に引き離して、その隙にミカの逃げた橋へと向かう。悠里が橋の手すりをバイクで走りながら二発発砲するのが見えた。ミカは無事だ。

『悠里、ミカに渡した万年筆があったら、それをこっちに投げてください!!』

レヴィンは、悠里が投げた銀の万年筆を足爪でキャッチすると再び雲を目指して上昇を始めた。吸血鬼も目の前の腹立たしい獲物を仕留めようと後を追って上昇してくる。レヴィンは上空で再び人間の姿に戻ると銀の万年筆の胴体をクルクルと回して、グリップ部分と、胴体部分との二つにバラした。グリップ部分のペン先、胴体部分の上端も鋭く尖って武器として使えそうだった。

(この二つを急降下しながら突き刺してやればヤツだって一溜りも無いハズだ)

レヴィンはそれらを一旦口にくわえるとハヤブサに姿を変え、獲物を目指して滑るように降下していった。

唯一、風を切る音だけが聞こえた。

眼下に獲物が間近に迫る、レヴィンは人間の姿へと戻り、口に咥えていた万年筆の二つの部品を両手に握り締めた。吸血鬼はレヴィンの姿を見上げると両手で二丁の短銃を抜き、撃った。

左右の短銃から放たれた二つの弾丸をレヴィンはかるうじて避け、加速する。貴族は怒りに吼えながら再び短銃を撃った。四つの発砲

音が鳴る。レヴィンは身をひねり、弾丸をかわす。

一発…二発…

吸血鬼は短銃を投げ捨てると手をかざしてニタリと笑った。

三発目の弾丸を避けようとしたレヴィンは、吸血鬼のテレキネシスで弾丸が軌道を変えて曲がるのが見えた。咄嗟に態勢をひるがえすも間に合わず、弾は彼の左肩を貫通した。

「ググッ！！」

唇を噛み締めて痛みを堪えるレヴィン。どうしても今ここで口を開ける訳にはいかなかった。

バランスを崩したレヴィンは、四発目の弾丸を太腿に喰らった。そして、急降下は落下へと変わり、吸血鬼へ向かって落ちていった。力を振り絞って万年筆を突き刺そうと試みたが、あっけなくかわされると、吸血鬼の繰り出した強烈な蹴りを受け、下を流れる川の中州へ向かって落ちていった。

川の中州には、先日の大雨で流されてきた大きな流木があった。その大木は上半分が折れた状態で上流から流れてきたのだろう。折れた部分は大きく尖り、地獄の針山のように斜め上を向いてレヴィンを待ち受けていた。

彼は地面に背を向けたまま落下し、その先には流木があった。レヴィンは折れた流木の先端に背中から腹を貫かれて止まった。

「ググッ！！」

空から吸血鬼が降って来るのがボヤけて見えた。川の流れる音がゆっくりと聞こえる。

（死の際は、全てがスローに見えるってホントなんだな……今は、



断末魔の叫びは途中からコポコポと血が泡を立てる音に変わった。レヴィンは吸血によって力を取り戻し。自らの力で流木から身体を抜くと、吸血鬼を押し倒して血を吸い続けた。血を吸われた吸血鬼の身体は見る見る干からびて、崩れ去った。

暗闇の中州で、ヘナヘナと力なく座り込んだレヴィン。

物理的な外傷は吸血によって治癒し始めていたが、口の中に含んだ聖水のせいで、熱湯を飲んだように口内はただれていた。コレばかりは治るまでに時間がかかりそうだ：

バシャバシャと水音を立ててバイクが近づいてくる。

「あらあら、いい男が台無しね」

悠里が前回の仕返しとばかりに嬉しそうに言った。

レヴィンはヘタリ込んだまま、悠里を恨めしそうに睨み返した。

「ふいーおととふあ、あふいかかいね」

『いい男とはありがたいね』と言いたかったが、口から出てきたのは別の音だった。

「はい？」

小首をかしげてニッコリと微笑む悠里。隣ではミカがクスクスと笑っていた。

レヴィンはこりゃダメだとばかりに砂の上に寝転ぶと、ゆっくりと息を吸い込んだ。

(今になって足が震えてやがった。隙を見せて聖水を吹くのは偶然の思いつきだったけど、ホント、ヤバかったな。吸血鬼は吸血鬼の血を吸うたびに強くなると言うが、俺達はただ喉の渴きが癒えるだけ。まったく、貴族退治なんて、割に合わな過ぎるぜ)

「レヴィン。帰らないなら置いてくわよ」

悠里が手を差し伸べる。レヴィンはうやうやしくその手を掴んで立ち上がると、悠里とミカの後をトボトボと歩き出した。

革ジャンのポケットからタバコを取り出して口に咥える。火を点けようとジッポのフタを開けたが、タバコの煙が口の中で沁みそうな気がして、吸うのをやめた。

バイクに乗って走り去る悠里とミカに手を振りながら、レヴィンは思った。

(撃った弾丸を曲げる技は意外と見えそうだな)

火の点いてないタバコを咥えたまま、レヴィンは独りで何度も頷いた。

### 第3夜 吸血菌と特效薬

翌日。

制服姿のミカはカフェバー・アルバトロスのカウンターに座っていた。

今日は、口内火傷でろれつが回らないバーテンダーの代わりに、黒髪を後ろで束ねた悠里が店番をしていた。とは言っても、店番はレヴィンの専属業務ではなく、週に二日程は悠里もカウンターに立ってバーテンダーとして店に出ていた。

「で、レヴィンさんは大丈夫なんですか？」

ミカは、カウンターの高めのイスにぎこちなさを感じているのか、何度も足元を見たり、十センチくらいの高さしかない背もたれに手を当てたりしていた。悠里が淹れたての「スワン模様のデザインカプチーノ」をカウンターに差し出すと、ミカは歓声を上げて写メを撮り始めた。

「ミカ。それを飲み終わったら、そろそろ行くわよ」

「あ、はい」

はしゃいでいたミカの表情が真剣に変わる。

あと数分で、彼女は【純粹な人間としての身体】に別れを告げ、【半吸血鬼】として生まれ変わる決心をしていた。

この数日の間にミカの身に起こった出来事を、まだ彼女自身が消化しきれてはいなかった。しかし、一度知ってしまった現実を忘れて普通の暮らしに戻るのには、彼女の性格上すつきりしない物があったし、レヴィンの言うとおりならば、自分の【吸血鬼の才能】を狙ってくる新たな刺客に再び襲われないという確証は無かった。

ミカはゆっくりと味わうようにカプチャーノを飲み干すと、悠里に向かってコクリと頷いた。

数分後。

ミカは悠里に連れられて前回案内された彼らのアジトにいた。

先日と同じようにソファーに座り、金の試験管立てに立てられた試験管を見つめていた。試験管の中には先日とは違う、微炭酸のジユースのように泡立つ紫色の液体が注がれていて、強い刺激臭を放っていた。ソファーの反対側には、あご髭を擦りながらミカを見つめるヨハンがいた。彼はただ心配そうにミカの顔を見つめるばかりで、声をかける様子は無かった。悠里は前回同様にミカの隣に座り、優しく手を握ってくれていた。

ヨハンは考えていた。ミカが人間に戻ったとしても、この先ずっと吸血鬼の襲撃を警戒しなければならぬ上位のクライアントになるのは事実だったが、奴らにそこまで目をつけられる才能をもったミカが、自分たちの仲間に加わったとしても、戦いの中で命を落とす可能性は十分にある。この仕事は才能よりも経験がものを言う闇の世界で、十分な経験を積む前に命を落とした仲間は数え切れない。どちらを選ぶか。いや、どちらかしか選べない未来なんて、未成年の彼女に突きつけるにはとても厳しすぎる現実だった。

「ミカ。この紫色の液体は、前回キミが飲まなかった二つの飲み薬とは全く別のものだ。この薬は吸血され感染した人間の血液中に巣食う【ヴァンフェキア】と言う吸血菌を無害化するものだ。【ヴァンフェキア】は吸血される事によって吸血鬼から全ての生き物に感染し、感染した個体は【ヴァンフェキア】が血液全体に繁殖して神経と精神を破壊され廃人となって命を落とす。その過程で【ヴァンフェキア】は体内の血液に感染し終わると、他の個体の血液を求め

て『飢え』の信号を脳に発して、凶暴な吸血行動を繰り返すようになる。

しかし、この薬の作用によってキミの体内の【ヴァンフェキア】は、キミの身体を破壊する力を失い、廃人となる事を防ぐ。だが、【ヴァンフェキア】が死滅した訳ではないので、努力しただいでは吸血鬼と等しい力を手に入れる事が可能な体になると言う仕組みだ。ただし、吸血鬼達のおぞましい血の呪いをも受け継ぐ事になり、尽きることの無い血の乾きと自分の中に芽生える凶暴性を常にコントロールしなくてはならない」

コクリと頷くミカ。

「ミカ。一度飲んだら、もう後戻りはできないぞ。少しでも迷いがあるなら、普通の暮らしに戻る選択肢を選んでも構わんのだぞ」

ヨハンは諭すように優しくミカへいった。ミカはヨハンの目を見て、それから、ずっと握り締めてくれていた悠里の手から指を離れた。

ミカはゆっくりと左手を伸ばして試験管を取った。それは人肌の温かさで、顔に近づけると刺激臭が一段と強く感じられ、シュワシユワと炭酸のはじけるような音が微かに聞こえる。

左隣に腰を下ろしている悠里の心配そうな視線を痛いほど感じる。愛する男性が豹変し殺されかけて感染した悠里が、そのフィアンセを探す為にこの道を選んだ時の気持ちを思うと、ミカはこんな安易な気持ちでこの世界に足を踏み入れてしまっただろうかと思つた。しかし、どちらを選んでも襲われるのなら、自分の身は自分で守れるようになりたかつた。根が真面目で自立心も強いミカは、前回差し出された薬を飲んで、記憶の中から消えてしまう彼らにこれからずっと守られるという境遇を受け入れがたい気持ちがあつた。

そして、先日、自分を襲った吸血鬼の騎士の事を考えた。

(私の血を吸った化物 )

あの身の毛もよだつような存在が徘徊する事実が、この世界の隠された本当の姿ならば、私の住むべき世界はきつと、この紫の液体の向こう側に存在するハズなんだとミカは感じた。

ミカは右手で鼻を思い切り摘むと、左手に持っていた試験管を一気に煽った。強烈な匂いと口の中が麻痺してしまいそんな苦味に体が折れる。吐き出しそうになるのを両手で口を押さえて必死に堪える。液体を何とか喉の奥まで追いやったものの、今度は激しく咳き込んでソファァーから崩れ落ちてしまった。

「ちょっと、ミカ!! 大丈夫!？」

目の前が暗くなり、悠里の声が遠くで聞こえた。額に触れた悠里の手がすごく冷たく感じた事で、ミカは自分の体温が急激に上昇している事に気が付いた。

「反応が早すぎる。悠里、ミカを医務室へ! 低体温培養をする!」

ヨハンの言葉を聞きながら、ミカは意識を失った。

## 第4夜 永遠の銀の城

ベッドの上。医療機器の定期的なシグナルでミカが目覚めます。

暗闇

(どうしてここに?)

ミカの時間は紫色の液体を飲み込んだ時まで遡る。

その液体を飲み干した直後に、身体が急激に発熱して痙攣を起した事を思い出した。首をめぐらして部屋の様子を窺う。窓が無い部屋は暗く、ミカは時間の感覚を全く失っていた。右手首に巻かれている医療ベルトを繋いでいる機材のランプが、高層ビルの先端で輝くランプのように一定のリズムでゆっくりと点滅を繰り返し、それに合わせて先ほどからのシグナル音が聞こえていた。

ミカは上体を起こした。

起き上がると、酷い頭痛がズキズキとこみ上げてくる。さっきまでの高熱の性だろうかと思いつながら、少し慣れてきた目で辺りを見渡すが、この小さな病室には自分の他には誰も居なかった。右手首の血圧計のような黒いベルトを外してよいものか考えていると、ドアが開いて悠里が部屋に入ってきた。左手にはマグカップが乗ったトレンチを持っている。

「目が覚めたようね。どう? 少しは落ち着いたみたいだけど」

「はい。起き上がったらまだ頭痛がするけど、それ以外は大丈夫です」

「よかったわ」

悠里は大きな瞳を細めてニツコリと微笑んだ。

「さあ、コレを飲んで元気出してね」

悠里はトレンチからマグカップを取って、ミカに手渡す。ミカはつい数時間前に飲んだ紫の液体がトラウマになっているようで、かなり慎重に臭いをかいでいた。

「ただのコーンポタージュよ」

悠里はクスクスと笑って、ミカのベッドに腰を下ろした。

ミカは悠里の言葉を聞いて安心した模様で、『フーフー』と息を吹きかけてから、ゆっくりと口を付けた。温かいスープを一口飲んで落ち着いたのか、ミカは天井を見上げながらほっとしたように方の力を抜いた。

「あつ！ 悠里さん今何時ですか？」

「夜八時よ」

時間を聞いて、ミカは小さく息を吹いた。

「そつえばアナタのお母さんがね、今日は泊まってもいいって言うってたわよ」

「えっ！？」

「これからは夜の活動が増えるでしょ。だから、ミカが動きやすい

よつにコチラでちょっと手を回しておいたの。でも、ミカのご両親を洗脳した訳じゃないから、安心していいわよ」

「はい……」

ミカは思った。これからは夜の活動が多くなる。その一言で自分がこれから直面するであろう現実へ、一気に引き戻された気がした。これからの暮しに不安がよぎる。

（私は悠里さんのようにこの世界で上手くやっていけるのだろうか。小学校まで無理やり習わされていた剣道が役に立つとは到底思えないしな……）

「ミカ。今週末からアルバイトを始める事にしておいたから」

「え？私が??」

「そうよ。カフェバー・アルバトロスでね。時給は九百円、仙台の相場ではマシな方ね。もちろん表向きだけで、実際はハンターとしての修行をしてもらうのだけだね」

そう言つて悠里はミカの手首に巻きつけてあつた医療ベルトを外してあげた。そのままミカの両手首を掴んで裏返す。ミカの手に入られていたタトウは綺麗に消えていた。吸血鬼の奴隷であることを示していた刻印が消えて、ミカは心身ともに開放されたといつても良い状態に戻りつつあるようだ。

「タトウが消えてる」

ミカが嬉しそうに悠里を見上げる。悠里はミカの頭を優しく撫で

てあげると、勢い良く立ち上がった。

「さあ、私たちの本当のアジトへ案内するわ」

「えっ、あ、はいっ！」

ミカは慌てて起き上がり、部屋を出て行く悠里の後を追いかけた。

二人は病室を出てミカが紫の液体を飲んだ部屋へと戻って来た。

そして、そこからまた別のドアを開けて秘密の地下道へと向かう。先を歩く悠里の後にミカが続いた。少し肌寒く感じるこの廊下には真新しい意蛍光灯が爛々と光っており、闇に潜むハンター達の隠れ家のイメージとはほど遠く清潔な印象をミカに与えた。

道は螺旋を描くように緩やかに地下へと延び、降り終わると更に奥へと続く長い一本道へと進んだ。その道幅は五十メートルと広くドーム型の天井もかなりの高さだった。

「うわぁ。地下の高速道路みたいに広いですね」

感嘆するミカ。

「驚くのは、まだ早いわよ」

悠里が楽しそうに笑う。

そして、二人がこの巨大通路をちょうど半分まで進んだ時、辺りの蛍光灯が一気に消え、すぐさま強烈な白い光が広大な地下通路を照らした。

「眩しっ！ー！ー！」

ミカが思わず目を細める。

「コレはね、実際の太陽の光と同じ性質の光源灯よ。万が一、このアジトにヴァンパイア達が進入しようとしても、この光原で灰になっってしまう仕組みなの。もっとも、まだ奴らがここまで侵入してきた事は一度もないけどね。さ、こっちよ」

二人は再び歩き始めた。やがて、この巨大な地下トンネルの終着点が見えてきた。そこには普通のドアを二枚ほど合わせた大きさの楕円型をした鏡がついており、銀のアンティーク調の額が周りを豪華に飾っていた。目の前に立つ二人の姿が映る。

「ミカ。これから色々勉強しなきゃいけない事があるけど、まずココでひとつ。訓えその一。ヴァンパイアは鏡には映らない。はい復唱」

「ヴァンパイアは鏡には映らない」

「うん。素直でよろしいわね。まあ、感知能力がある私たちにはあまり関係ない事だけどね」

そう言っつて悠里は鏡の中へ入って消えた。

「あっ、待ってください」

ミカは悠里の後を付いて行こうとしたものの、飛び込むタイミングを逃してしまった。『鏡なんて通り抜けられるハスが無い』という理性がミカの中でじわじわと広がった。

ミカは気を取り直して、鏡を指先でちょんちょんつと鏡を突いてみた。鏡は冷たいゼリーに触れているかのように弾力があり、プルプルと波打つ。彼女は一步後退りをしてから意を決すると、両目をつがったりと閉じてから、勢いをつけて思い切り鏡に跳び込んだ。一瞬ヒヤツつとした冷たい感覚がミカを包み込んで、直ぐに温かい空気に触れる感触を皮膚で感じた。鏡の向こう側に出たミカが恐る恐る目を開けると、そこには野球ドームを大きくしたようなすり鉢状のとてもなく巨大な空間が広がっていた。

太陽の無い空には、先ほどのトンネルと同じように擬似太陽の光と温もりが降り注いで、空の代わりに、大理石のような色をした鉱物が大きなタイルのように天井を埋め尽くしていた。その空には鳥が数羽跳んでいるのが見え、遠くからは野鳥の物と思われる鳴き声が聞こえた。周囲はアジアの熱帯を思わせるような鬱葱としたジャングルが広がっており、わずか数メートルで二人の視界を遮っていたが、目の前にはキチンと整備された芝の道が奥へと続いていた。

「凄い……」

ミカは暫くの間、白い空に見とれていた。

「さっ、そろそろ着くわよ」

悠里がミカを促がす。

並んで歩き出すと悠里はミカに説明を始めた。

「経験を積んで力を得たヴァンパイアは、自分の身体を想像したも  
のに変える事ができるの。ヴァンパイア本人が望むなら、ミカを襲  
ったあの騎士のように、おぞましい悪魔のような姿にだってなれる  
の。でも、私たちのような半吸血鬼は、本物のヴァンパイアよりは

力の劣る存在だから、実際に血を吸って殺害した生き物にしか姿を変えることが出来ないの。そこでこのジャングルには、地球上の主要な生き物が飼育されていて、私たちがヴァンパイアと戦うのに役立つっているわけ」

「血を吸って殺すって……」

「そう。最初は誰でも吸血する事に抵抗を感じるけれど、コレばかりは慣れるしかないわね。私だって、結構苦労したのよ。」

遠くを見て話す悠里を見て、ミカはレヴィンとの会話を思い出した。結婚式の当日に愛するフィアンセに血を吸われて瀕死の重傷を負った花嫁。彼女は今でも、そのフィアンセを探して孤独な戦いを続けている。

（私は悠里さんみたいな目的があるわけじゃない。突然の出来事に流されるようにやってきたこの世界で、私には何が出来るのだろう……私の人生は一体どこへ向かって行くのだろう……）

それから二人はヴァンパイアと半吸血鬼の基本的な知識を話しながら、ジャングルの中を歩き続け、とうとう熱帯のジャングルを抜けた。

突然開けた視界の先は、壁一面が地下の地層をそのままに荒く剥きだした絶壁になっており、天井の大理石の空まで高くそびえ立っていた。そして、その崖に後ろ半分が埋もれるような状態で、中世ヨーロッパ風の古城が建っていた。城門には、二体の大きなガーゴイルの石像が威嚇するように立っていたが、門扉は倒れたまま朽ち果てた木屑となっていた。門の先に見える本館には、形の異なる二つの塔が侵入者を見下ろすように立っていた。ひとつは灰色のレンガ造りの塔で、飾り気のないがっしりとした四角柱の形をしていた。

もうひとつの塔は、紫色のレンガで造られた円柱型の塔。この円柱型の塔は外側に向かってやや斜めに傾いて立っていたが、塔は二つとも後ろ半分が絶壁に埋もれた状態になっているので倒れる心配は無さそうだとミカは思った。

「ここに来るのは久しぶりだわ」

悠里は手をかざして二つの塔を見上げていた。その表情には十年ぶりに母校を訪れた卒業生のような懐かしさが表れていた。ミカも悠里を真似て同じように塔を見上げる。まるでおとぎ話に出てくる魔女の城のようだとミカは心の中で思った。

「ここが私たちの本当のアジト、『永遠の銀の城』よ。さあ、中へ急ぎましょっ」

悠里は軽々と朽ちた瓦礫を乗り越えて、中へと消えていった。

## 第4夜 銀の城の女王

ミカは悠里の後を追って『永遠の銀の城』と呼ばれた彼らの秘密のアジトへと足を踏み入れた。

二体のガーゴイル像が見下ろす朽ちた門を潜り抜けて中庭に入ると、中庭を縁取る白い外壁は所々崩れ、中のレンガや石垣が露になっていた。地面にはレンガや瓦礫が散乱し、門から城の入口へと続く道の両側には、白木の大木が枯れたままの状態で並木道を作っていた。そんな廃れた景色の中でミカの目を引いたのは、中庭のあちこちに群がるように咲いている小さな白い花だった。

ミカはしゃがんで顔を近づけてみた。花は風にそよぐたびに銀色の花粉を花びら一杯にまぶしながらゆっくりと揺れていた。

「その花の名前はプレタロン。花粉と球根から戦いに必要な銀を精製する事ができるのよ」

悠里が説明をする。

「銀色の花。すごく綺麗ですね」

ミカは手に付いた銀粉を指で擦りながら立ち上がった。

「さあ中へ行きましょう」

二人は再び並んで城の入り口へと向かった。

城の入り口の扉はしっかりと閉じられていたが、二人が近づくと扉は重厚な構えとは裏腹に、音も無く開いた。悠里が入り、ミカが続く。

扉の中は大きなエントランスホールになっており天井には豪華なシャンデリアが吊るされていた。その銀製の古いシャンデリアには、蝋燭が七本刺してあったが、炎が灯っていたのはその内の二本だけだった。

二人の来客に気が付いたのか、薄暗いホールの向こうからゆつくりと軽い足音が聞こえる。

暗がりの中から現れたのは、一人の女性だった。

彼女は黒く古風なドレスに身を包み、つま先から指の先までを、ドレスの中にしっかりと隠していた。結い上げた長い黒髪を覆うように包み込んでいる黒いベールは、顔の上半分がすっかり隠れるようにおろされていた。ベールの下から垣間見える肌は、白と表現するよりは透明と言ったほうが良いのではないかと思われるほどに澄んでいて、鮮血のように赤く艶やかな唇をより一層際立たせていた。

「お久しぶりです。マグダラン」

悠里が小首を傾けてにつこりと微笑む。

マグダランと呼ばれたその女性は。ゆつくりと顔を上げてベール越しに悠里の視線を見つめ返し、微笑んだ。知性と品を兼ね備えたその雰囲気、初対面のミカは何故か安らぎを感じた。ミカの視線に気が付いたマグダランは再びゆつくりとミカの方を向いて微笑みかけた。

（ようこそ我が城へ。待っていましたよ。咲月ミカさん）

彼女は口を動かさずにミカの心に直接語りかけてきた。ミカは戸惑いながらも深々と頭を下げた。

「ミカ、中を案内するわ。マグダラン。私が案内しても良いですよ  
ね」

悠里の問いに女主人は静かに頷いて二人に道を開けた。

悠里とミカは彼女にお辞儀をしてから、城の中を見て回った。エントランスホールの奥のエリアにはキッチンや浴場など等があり、その上階には客室のフロア、そして最上階はマグダランが暮らしているフロアになっていた。キッチンも客室も、かなりの年代を感じさせるものだったが、上品かつ、洗練された雰囲気だった。マグダランの暮らす最上階には上がることは無かったが、きつと豪華なお部屋なんだろうとミカは想像していた。

奥のエリアを一通り案内し終わると、二人は再びエントランスホールに戻った。もうマグダランの姿は見えなかったため、悠里はそのままミカをつれてホールの右手にある円形の扉を開け、斜めに傾いた円塔へと向かった。塔の中は微かに硫黄の匂いがした。

「ここには、私たちがヴァンパイアと戦うのに必要な書物が納められている図書館や実験施設があるの。ちょっと待ってて」

悠里は塔の入り口付近にミカを残したまま奥へと消えていった。

一人残されたミカは近くの本棚を覗いてみた。三メートル以上の背丈の本棚が、全ての壁面とフロア中に、人がやっと一人通れる程の狭い間隔で隙間無く並べられていた。これがこの塔の最上階まで続いているとしたら、一体どれほどの本がこの塔に納められているのだろうか、ミカは思った。本棚には世界中の色々な言語の本が納められおり、様々な文字で表紙を飾られた本がびっしりと隙間無く並べられていた。ミカはその中の一冊を手に取り、適当にパラパラと眺めていると、悠里が帰ってきた。

「お待たせ。まずはこのあたりから読み始めるといいわ」

悠里は三冊の本をミカに手渡した。

「……『吸血鬼、歴史とその生態』、『雛のための血の訓え』、『銀の聖性とその秘密』……なんだか難しそうですね。悠里さんはここに有る本は全部読んだんですか？」

「うーん、私は四割くらいかな。レヴィンは大分読んでるみたいだけれどね」

「レヴィンさんが！！………結構意外ですね」

「あの人は、ああ見えて意外と読書家というか、研究熱心なのよね。さあ、次は闘躯の塔へ行きましょう」

悠里は楽しげに歩き出した。

「は、はい！」

二人は再びエントランスホールを通り抜け、反対側の重そうな鉄扉を開けて悠里が闘躯の塔と呼んだもうひとつの塔へと入った。中は小さなエレベーターホールになっていて、壁には移動できる階を示しているであろうルーン文字のような記号が縦に並んで七色に輝いていた。

「ここでは、様々な状況での戦闘訓練ができるの、暗闇、水中、深海、低酸素、超重力……その他色々。でも、ミカがここに入るのもう少し経験を積んでからね」

悠里はくるりとエレベーターに背を向けてエントランスホールへ

と歩きだした。

ホールにはやはりマグダランの姿はなく、シャンデリアの2本の蝋燭だけがゆらゆらと揺れていた。悠里はミカをここに案内して数冊の本を貸し出す、という今日の目的を達成したので、地上へ戻る前に彼女に挨拶をしたかったのだが、気まぐれな女城主の気配すら感じる事ができなかったので、マグダランがいるであろう奥へと続く扉の方を向いてお礼を言った。

「ありがとうございました、マグダラン。今日はこれで帰ります」

悠里とミカは奥の扉に向かって軽くお辞儀をしてから城の出口へと向かった。外へ出る扉を開けると、城の奥から微かな風が吹いてきて二人を包み込んだ。

再開を楽しみにしていますよ。月夜の娘たちに祝福がありますように

慈愛に満ちた彼女の声が響く。

二人は立ち止まって、もう一度お辞儀をすると、枯れた並木道を歩いて彼女の城を後にした。

## 第5夜 黄昏ドライブ

悠里とミカがマグダランの城を訪れてから一ヶ月後

スタンククラウド探偵事務所。

紫色の煙が立ち込める昼下がりの事務所内で、ヨハン・スタンククラウドは、啞えタバコに目を細めながら、パソコンに向かって舌打ちをした。

「クソツ!!!」

啞えていたタバコを、吸殻で山盛りになったステンレスの灰皿に押し付けてもみ消すと、彼はモニターすれすれまで顔を近づけて充血した目を大きく見開いた。そして、画面上に隙間無く不規則に並んだ数字とアルファベットをクリックとドラッグを繰り返しながら、それらをひとつずつ丁寧に消していった。ミスの許されないこの難解なパズルを、ヨハン十三回目の挑戦でクリアすると、彼は声を出して欠伸をし、黒革張りのワークチェアのリクライニングに全体重をかけて大きく伸びをした。

画面上では、消えた文字たちが再び浮かび上がり、巢に群がるミツバチのようにグルグルと動き回って、一通のメールへと変わった。ヨハン再びタバコに火を点けると、紫の煙をくゆらせながら内容をメールの依頼内容を確認した。

「フン。ディスクの回収とは、ずいぶんと探偵事務所らしい依頼だな」

独り言を言いながらワークチェアを回転させて立ち上がると、無精ひげを摩りながら彼は思った。

(ミカの初仕事にするにはちょうど良いかもしれんな…)

ヨハンは、事務所のテーブルに置いてあった空のマグカップを握り締めると、腰を叩きながらキッチンへと向かった。

その頃、一階のカフェバー・アルバトロスでは夕方の開店に向けてレヴィンと悠里、ミカの3人が準備をしていた。

床をモップがけしていたミカが、入り口のドアの郵便受けにハガキが届いているのに気付き、モップをカウンターに立て掛けてハガキを手を取った。

「あれれ。間違っただけ届いたのかな？」

ミカはハガキを何度もひっくり返して確認しながらカウンターへと戻ってくる。

「あん？ 間違い??」

グラスを磨きながらレヴィンが訊ねる。

「だってこの内容、この近所の出版社宛に出したみたいですよ。えーと……」

『【読者の皆様へ】のコメント、大変遅くなり申し訳ございません。以下の内容での掲載、宜しくお願い申し上げます。』

毎日沢山の方が閲覧に訪れてくださって、大変励みになっており

ます。

最近は更新が遅れ気味ですが、いつの日か感想を送って頂けるような作品になるようジワジワと精進してまいります。

飽きっぽい私ですが、皆様のアクセスがある限り頑張って更新してゆきますので

今後とも宜しくお願い申し上げます。

汐崎 シオン

ふうん。読者じゃなくってウチのお店に届いちゃいました。残念な感じですね、この人」

「あはは。たまに届くんだよね、その出版社宛の郵便物。ウチの住所が三十三ノ三で、出版社が三ノ三十三だからな。締め切りにも追われて間違えたのかな」

「注意力が足りないわ。ダメね」

悠里がエスプレッソマシンのス調整をしながらピシヤリと斬り捨てた。

「まあまあ、いいじゃんか。オレが後で届けてやるからそこに置いててくれよ」

レヴィンがグラスを拭きながらアゴでレジカウンターの方を指し示した。拭きあげたグラスを棚にしまおうとミカに背中を向けた時、

「レヴィンさん。ここでいいですか？」

と、背後からミカに置き場所を聞かれ、上半身をクルリとひねってレジの方を向くとウンウンと頷いた。ミカの方を向いたまま手を

伸ばして、グラスを後ろの棚に置こうとしたが手もとが狂ってグラスは棚の端からバランスを崩して転がり落ちた。

スローモーションで床へと落下していくグラス。

レヴィンはレジを見ながらグラスをしっかりと置いたつもりでいたし、悠里は調整していたエスプレッソマシンの蒸気の音に気を取られて、その様子を全く見ていなかった。

「あつ！ 落ちる！！」

ミカはそう言って反射的に片手をカウンターに付いた。

その時、ミカは自分の体をやけに軽く感じて、このまま片手の踏ん張りだけでカウンターを軽々と跳び越えるイメージが頭の中に閃めいた。そして次の瞬間には、イメージと全く同じ様に体が反応して軽々とカウンターを跳び越えて向こう側に着地した。ミカが落ちていくグラスを見ると、グラスはまだ落下の途中で、床に向かってゆっくりと落ちていくのが見えた。コマ送りのように流れる時の中で、ミカは更に加速して、レヴィンの横をすり抜けながらしゃがみ込むようにグラスをキャッチした。床からあと四センチ、ギリギリセーフだった。

「はっ……取れた……」

自分でも驚いてヘナヘナとへたり込むミカ。

「うお！！ ミカがドライブした」

レヴィンが思わず叫んだ。【ドライブ】とは血の力を使って、瞬間的に反射神経、運動神経を高める技。一時的に筋力を高める【剛

力」と同じく、ヴァンパイア達の戦いの基本だ。

「訓練の成果が出ているようね」

悠里が作業していた手を止めてニッコリと笑った。

「自分でも、ビックリです」

ミカが立ち上がりながら答えた。レヴィンにグラスを渡し、自分の両手をマジマジと見つけた。

「サンキュー、ミカ」

レヴィンは受け取ったグラスを慎重に棚へ戻した。背後から、悠里の『ソレ、高いんだからね!』という視線を感じる。

チリリイ……チリリイ……チリリイ……

店のアンンティーク電話が内線を告げて鳴り響いた。上の事務所でヨハンが呼んでいる。

「依頼かしらね。時間も有る事だし、みんなで行きましょう」

悠里はサロンで手を拭きながら二人を促した。

## 第5夜 覚醒する未来

スタンクラウド探偵事務所。

下階から部下達が入って来る音を聞いて、ヨハンはワークチェアを回転させて部下の方を向いた。

いつもの二人、レヴィン・悠里に並んで新しい仲間、ミカの三人がいる。

「ウスッ」

片手を軽く上げて挨拶をしたレヴィンはどっかりとソファアに座り、早速タバコに火を点けた。

「ボス、おはようございます」

続いて入ってきた悠里は少しだけ微笑んでヨハンの前を横切ると、アンティーク調のピアノの前の椅子に腰を下ろした。

「ヨハンさん、お早うございます」

最後に入ってきたミカは、やや緊張した面持ちで深々とお辞儀をすると、入口に立ったままきよるきよると辺りを見回した。

「おう、新入りちゃんはここに座んな」

レヴィンは自分が座っていたソファアにミカが座れるくらいのスペースを作ってやると、ミカに座るよう促してボンボンと叩いた。

「あ、はい」

ミカはいそいそとレヴィンの隣に座った。一瞬の沈黙の後、ヨハ  
ンが口を開いた。

「早速だが、依頼の内容を説明する。今回の依頼主は世界血液銀行だ。ミカのために軽く説明しておくが、世界血液銀行とは、表社会の様々な医療機関と協定を結び、そこから流通される血液を使って、半吸血鬼、ヴァマイラと呼ばれる我々が日常生活を送る上で欠かすことの出来ない薬品の精製を行っている機関だ。世界中の善意あるヴァマイラ達が血に餓える呪いから逃れるためには、この機関から入手できる薬品を摂取して吸血菌ヴァンフェキアの働きを抑制する必要がある」

「まあ、ウチみたいに自前でクスリを精製できる機材があるところにはあまり関係ないところだけだな」

タバコを燻らせながらレヴィンが付け加えた。

「確かに。レヴィンの言う通り高度な設備と知識があれば、世界血液銀行と取引をする事はほとんど無い。しかし、世界的に見ればウチのような組織は稀な存在で、ヴァマイラの世界における血液銀行の存在は大きい。そして、対するヴァンパイアの世界から見れば、人類の血液が流通する血液銀行は、ヴァンパイアとしての潜在能力の高いDNAを見つけるには格好の対象となるのだ」

「でも、血液銀行には手錬たガード達がいるって聞いた事がありますけど」

悠里が口を挟む。

「残念だが、精鋭部隊と高度なセキュリティシステムで護りを固めている所ほど、内部からの攻撃には脆いものだよ」

「って事は、裏切ったヤツがいるのか」

「そついう事だ。銀行内のデータベースから、吸血菌に感染した場合の感応保有値が高い血液を割り出した形跡があり、犯人はそのリストを持っていずれかのヴァンパイア克蘭と接触を計ると思われる」

「なるほどな。そのリストが克蘭の手に渡る前に回収するってことか」

レヴィンが相槌をいれる。

「銀行から失踪した人間は、リオン・グラハム、ロイ・マシューズの二名だ。その二人を追ってサラ・ガナードが仙台へ向かっている。キミ達は彼女と合流後、協力して対応に当たってくれ」

「サラが来るんですか!」

悠里が嬉しそうに声を上げる。悠里とサラは以前同じ組織で仕事をしていた事が有り、彼女の事を姉の様に慕っていた。

「そつだ、悠里はサラと顔なじみだったな」

ヨハンが応じる。サラの昔話をしている二人をよそに、レヴィンが隣に座っていたミカの肘を小突いた。

「なっ、何ですか？」

「サラはな、レズかもしれないから一応気をつけておけよ」

「はい？」

ミカはキョトン顔でレヴィンの顔を覗きこんだが、ヨハンが本題に戻ったためミカはそれ以上の追求を諦めた。

「リオン・グラハムは血液培養の主要なポジションにいた人物で、今回の首謀者と考えられる。また、クラン側の援護も予想される。銀行側からの情報で、彼らの潜伏先はここ、仙台。場所からして、データを引き渡す相手のクランはロキアかシュタイツであろうと考えられる」

「ロキア……ですか」

ミカが困惑の表情を浮かべる。ロキアはミカを襲撃してヴァンパイアにしようと画策していたクランだ。

「ロキアは最近、アジア圏での活動が活発だ。元々アジア圏を支配していたシュタイツとの抗争が活発化してきているな」

ヨハンが説明を続ける。

「銀行側はご親切にも二人のDNAサンプルを送って遣した。後は奴らが行動を起こす前に対処することだ。2人がヴァンパイアクランに接触してからでは、ヴァンパイアの相手もしなくてはならなくなる。そうなる和我々としても厄介だからな。今回ミカは悠里と共に行動すること。以上だ」

「了解だ、ボス」

レヴィンが立ち上がって隣に座っているミカを見下ろして笑った。

「なんだよ。『不安が一杯です……』みたいな顔するなっつて」

「大丈夫よ。私が一緒だし、今回はサラもいるんだらか。サンプルを飲んで出かけましょう」

不安げな表情のミカの肩を悠里がポンポンと叩く。ミカはレスの件でレヴィンをもっと追求したかったが、レヴィンは彼女の視線に気づかないフリをして口笛を吹いていた。ミカは仕方なく本題に戻った。

「ところで悠里さん、サンプルって飲み物なんですか？」

「そうよ。相手の血を飲めばその人に近づくだけで居場所が把握できるのよ。本に書いてあったでしょ。」

「やっぱり血なんですね……」

ミカがしょんぼりする。

「まあ、慣れるこった。この仕事をしてると色んなものの血を味わう事になるからな。それにミカがいつも飲んでる錠剤だって血なんだぞ。」

「でもあれは錠剤だし……」

「レヴィン、ミカをあまりからかわないでよ。今回のDNAサンプルも錠剤だから大丈夫よ」

「あんまり甘やかすのも良くないぜ、悠里先輩。活き血をガブガブ飲める元気娘じゃないとこの世界じゃやってけないぜ」

「ゴホン！」

ヨハンが咳払いをひとつ。皆の視線が彼に注がれると、ヨハンは自分の腕時計をトントンと指で叩いて、それから事務所の出口の方を指差した。早く仕事に取り掛かれ、のジェスチャーだ。

「スミマセンッッ！！」

部下達は声を揃えて気まずそうにボスに挨拶をすると、各々錠剤を飲み込んで、いそいそと出口へと向かった。

その日の夕方。

サラが指定してきた合流場所へ向かう途中、ミカはレヴィンと悠里に日中の出来事、自分がドライブしてレヴィンが落としたグラスを拾った時の事を話していた。

「あの時、実際にグラスが落ちるよりも先に、グラスが落ちるように見えたような気がしたんです」

「あはは。誰でもドライブの速さに慣れない頃はそんな風に錯覚するもんだよ。ヴァマイラになって予知能力も身についたって言ったら、そりゃあ無敵過ぎるぜ」

「でも、レヴィン。今までもそんな風に予知能力を身につけた人だっているのよ」

「まあ確かにそうだけだな。んじゃあさ、本当にミカが予知能力を身につけたのか、ちょっと実験をしようじゃないか」

とぼとぼ歩いていた三人はレヴィンの提案に足を止めた。

「なぐに、難しい分析はヨハンに任せるとして、今からオレと10回じゃんけんをして全部勝ったら、半分くらいは信じてやってもいいぜ」

「はい。いいですよ」

ミカも自分の力を試してみたい気が有るようだ。

「ドライブ無しの後出し無しだからな。いくぞ」  
「はい。」

「じゃん、けん、ポン！」

レヴィンはグー、ミカはパー。

「じゃん、けん、ポン！」

レヴィンはチョキ、ミカはグー。

その後も六回ミカは勝ち続けた。

「むむう。八回も連続で負けるとは、本当にミカには見えてんのかな」

「なんて言うか、レヴィンさんが手を出してるイメージが『じゃん、けん、』の『けん』位の時には見えるんです」

オデコを擦りながらミカはイメージが出てくるタイミングを伝えた。そして、ヘナヘナとビルの壁に寄りかかった。

「ちよつと、ミカ、大丈夫？」

慌てて悠里がミカの体を支えた。

「はい……でもちよつと、喉が渴きました。でも私……おかしいです、さつきも錠剤を飲んだばかりなのに……」

悠里とレヴィンは顔を見合わせた。血の力を使わない限り、こんなに急激な消耗はありえなかった。それはつまり、悠里やレヴィンが血の力を使ってドライブでスピードを上げるのと同じ様に、ミカは血の力を使って予知をする能力を見につけようとしている事を意味していた。壁に寄りかかっていたミカが、目を上げて向こう側のビルの角を指差した。

「二秒後……赤いTシャツの男の子です」

皆の視線の先。そのビルの角から赤いTシャツの若者が角を曲がって現れ、ビルに寄りかかり苦しそうに肩で息をしているミカの前を通り過ぎて行った。

## 第5夜 合流

ミカはもたれ掛っていたビルの壁をズルズルと滑るようにしゃがみ込んだ。そして、悠里が差し出した錠剤を力なく受け取って口へと押し込んだ。目を閉じて、自分の体内にジワジワと血液が広がっていく感覚を感じる。暫くすると、ぼやけていた視界も定まり、血の枯渴からくる手の震えも治まった。レヴィンが屈み込んでミカの様子を窺う。

「ミカ、その力は暫く使わないほうが良さそうだな。消耗が激しすぎて危険だし、先が読めてもヘタリ込んでしまったら殺されて終わりだぞ」

ミカはまだ少し霞む視界を整えようと瞬きを繰り返しながらレヴィンを見つめ返して言った。

「はい…分かりました。もう大丈夫です、もう立てます」

ミカはゆっくりと立ち上がると、すみませんでしたと二人に頭を下げた。

「いいのよミカ、謝る事じゃないわ。でも、この力が実戦前に分かってよかったわね。レヴィンの言うとおり、気を付けて使った方がよさそうね」

「はい」

ミカは再び頭を下げた。

「さあ、サラも待っている事だし、合流地点へ急ぎましょ」

悠里はミカの手を取って歩き出す。彼女は久しぶりに親友のサラに会える事が嬉しいらしく、珍しく上機嫌だった。ミカの手を取って歩く悠里の影が長く伸びる。気が付けば、西日が輝きを増しながらゆつくりと傾き出す時間になっていた。サラとの合流時間はまもなくだ。レヴィンは不安そうに二人の後から歩き始めた。何が不安なのか、不吉なのか、この先に何かが起こりそうな、どんよりとした胸騒ぎを拭い切れずにいた。そんな思いを巡らしながら、彼は沈んで行く夕日を恨めしそうに見上げた。

サラが合流地点に指定してきた場所は、ヨハンの事務所から歩いて二十分ほどの雑居ビルの屋上だった。一階の和菓子屋の隣にあるエレベーターで最上階へ上がると、正面には商工会のオフィスがあった。三人は廊下を左へと進み、屋上へと続く鉄の扉を開いた。

キュツツと金属が擦れる音がして扉が開いた。外からは今まさに沈んで行くこうとする夕陽の光が廊下へと射し込み、三人は目を細める。そして、その視界の先に見えたのは夕陽を浴びて佇む一人の女性。彼女は西日に染まる路地裏の繁華街を見下ろしていた。

「サラ！！」

悠里が彼女の名を呼んで駆け寄る。サラは悠里の方を振り向くと両手を広げて悠里へと駆け寄り、再会の抱擁を交わした。

「悠里、久しぶりね。最後に会ったのはエジプトだったわよね」

悠里よりも少し背の高いサラは、悠里の両肩に手を添えて彼女の顔を覗き込む。

「相変わらず綺麗な瞳ね、悠里」

「何を言ってるんですか！？ サラには敵わないですよ」

微笑む2人。そして一瞬の沈黙。

レヴィンは『やれやれ、また始まった……』と言わんばかりにミカへアイコンタクトを送る。ミカはヨハンの事務所でレヴィンが言っていた『サラはレズかもしれないから一応気を付けておけ』の一言を思い出した。ミカは無意識のうちに一歩だけ後ずさりをした。

「ゴツ、ゴホンー!!」

レヴィンがワザとらしく咳払いをする。再会の喜びに浸っていたサラと悠里は我に帰って、屋上の入り口に忘れ去られていた二人の方を向いた。

「よ、ようサラ。久しぶりだな。紹介するよ。新しい仲間のミカ、ピチピチの女子高生だ」

レヴィンはそう言ってミカを自分の前に引っ張り出すと、両肩を掴んでぐいぐいとサラの方へ押し出した。

(ちょー!! 何すんですか!?)

ミカはサラに悟られないようにニコニコ微笑みながら、テレパシーでレヴィンへ叫んだ。サラはミカへ歩み寄ると、先程と同じ様にミカの瞳を覗き込んだ。

「女子高生ちゃん。あなたは強い目をしているわね。きっと良いハ  
ンターに成るわよ」

「アハハ、ドウモデス」

ミカはサラに気付かれない様に、後ろに立つレヴィンの靴を静かに踏み潰した。

## 第5夜 墮ちる日

「さあ、早速仕事の話に移りましょう」

サラはそう言うと、さっきまでの優しい眼差しからハンターの顔つきへと表情を変えた。ビルの屋上に吹き荒ぶ夕暮れの風が、彼女のブロンドの長髪をなびかせる。サラは右手でゆっくりと髪を書き上げると、南西側にあるひとつのビルを指差した。

「あそこに見えるビルの屋上で、まもなくディスクの受け渡しが行われることになっているわ。言うまでもないけど、今のところヴァンパイアの血液反応は感じないわね。彼らが来るのか、それとも、手下の人間が来るのか。いずれにせよ、二手に分かれて行動しよう。悠里とミカはここに残って。私とレヴィンで現場を探ってみましょう」

四人の中では、サラが最も古株のハンターであり、レヴィンと悠里はサラの指揮能力や状況判断を信頼していた。彼女と共に成し遂げたミッションは数え切れないほど有り、その中で悠里がサラから受けた影響は大きかった。戦闘方法や血の力の運用術について、悠里は自分がサラの弟子だと自負していた。

「分かったわサラ。さあミカ。あなたの視力も相当研ぎ澄まされているみたいだから、用心してね」

悠里の口調は優しくだったが、ミカに注がれる視線は緊張を帯びて鋭かった。

「はい。分かりました」

ミカの顔には緊張と不安の色が見て取れた。

サラの提案にミカは内心ホツとしていた。ミカは、初任務でいきなり取引現場へ乗り込んで、ヴァンパイア達とやり合う自信など全く無かった。マグダランの城から帰ってきてから、彼女は悠里やレヴィンからヴァンパイアハンターとしての基本的な訓えを受け、身体の使い方や戦闘方法などの訓練を積んではいたが、実践の経験はまだ無い。それはミカにとって最大の不安材料であった。今までミカの目の前で圧倒的な強さをもってヴァンパイア達を退けてきた悠里や、トリッキーな戦法を使い単独でヴァンパイア貴族を倒してしまふレヴィンの強さは心強いものだったが、乱戦時の咄嗟の出来事に、自分独りの力でうまく対応できる自信がミカには無かった。しかし今は、この場所で見張りと言う間接的な仕事を任された事で多少リラックス出来る余裕を自分の中に感じていた。

「でもよ、サラ。ホントにあそこで受け渡しが行われるのなら、どうしてヴァンパイアの反応が感じられないんだ？人間だけで受け渡しを行うつもりだとしても、血液銀行を裏切った奴らだってヴァマイラなんだろう？」

レヴィンがサラに疑問を投げかける。

「ええ。でも、彼らは気配を消す事が出来るの」

サラはそう言うとレヴィンに得意げに微笑んだ。

「そんな血の力の話は聞いた事がないぞ」

「そう。これは血の力じゃなくって新薬による特殊効果なの。私も

今回の件で初めてその存在を知ったの」

「そんなものがヴァンパイアの手に渡ったら、俺達の仕事は益々厄介な事になっちまうだろ。なっ悠里」

「厄介どころの話では済まなくなるわ」

悠里は頷きながらレヴィンの意見に同意した。サラは悠里の不安をなだめるように近づいた。

「そう。だから私達がそれを阻止するのよ」

そして、少し間を置いてミカに視線を落としながら

「大丈夫。私達なら出来るわよ」

と付け加えた。

「さあ、行きましょう。色々と現場の下調べをしないとね」

「OK。んじゃあ、またな悠里。気を付けてしっかり見張れよ、ミカ」

サラとレヴィンは下階へと通じる鉄扉へと歩き出した。

「レヴィンさんも気をつけて」

ミカの言葉にレヴィンは後ろ手に手を振りながら鉄扉の向こうへと消えていった。金属の擦れる音がして扉が閉まると、屋上は外界から取り残された静かな孤島のように感じられた。穏やかな風と夕暮れの匂い。夕日が間もなくビルの谷間へと沈むのに備えて繁華街

のネオンが輝き始める。悠里は手すりに沿って屋上を一周すると端にそびえる大きな貯水タンクへと近づいていった。

「ミカ。感覚を遠くまで飛ばし過ぎないようにね。それだけ血の消耗が早くなるから」

悠里は錆び付いた貯水タンクの脇に座り込んで目を閉じた。ミカが悠里の隣へ座る。

「私、なんだか凄く嫌な予感がします…良くない事が起こりそうな、そんな気がします」

ミカの不安げな声。

「初めての任務で嫌な予感がしない人なんていないものよ」

悠里は目を閉じたまま答えた。

「…そうですね。任務に集中します」

悠里の真似をして、ミカもゆっくりと目を閉じた。

二人の感覚は、レヴィンとサラの血液反応を感じている。目的のビルへと向かっているようだ。彼らが向かうビルには多くの人間の温もりを感じる。人間のみ。ヴァンパイアの反応は無い。

（悠里、聞こえる？）

悠里の脳内に直接サラの声が響いた。

（ええ。聞こえるわよ）

悠里もテレパシーでサラに応じる。

（今から約三十分、私とレヴィンの血液反応を消すわ。心配しないで、例の新薬をコチラも試してみるだけだから。）

（分かったわ。気をつけて、サラ）

悠里は瞳を開いてミカに告げた。

「ミカ。いよいよ始まるようね」

その頃。

ビルへと向かう路地裏でレヴィンは大きな白い錠剤を思い切つて飲み込んだ。

「サラ、本当に副作用とかは無しだぜ」

「大丈夫よ。私はこれで3回目だから」

サラも同じように錠剤を飲み込む。そして二人は細い路地の角を曲がると、目の前にそびえるビルを並んで見上げた。

十分後。二人はビルの屋上に建てられた倉庫の屋根裏に忍び込んでいた。下には八人ほどの人間がいる。サラが覗き見た限り、この中に血液銀行の2人は含まれていないようだ。身を屈めて潜むレヴィンの直ぐ脇には大きな排気ダクトがあったが、それは腐食して所々朽ち果てていた。ダクトは屋根裏を通過する部分で大きく外れて

いて、下の排気を外に出す役目を失っているどころか屋根裏一杯に大きな排気音と下の階から上がってくる油臭い熱気を吐き出している。レヴィンは興味本位でダクトを触った指が、想像以上にベトついて悪臭を放っている事にガツカリした。気持ちを切り替えて、彼はサラに声をかけた。排気口の騒音の性で小さい声で話しても下には全く聞こえそうも無かった。

「サラ、奴らがそろったところを一気に踏み込んで一網打尽にするって作戦でいいんだな」

サラは何度か頷いてレヴィンを見た。

「その作戦は、少し違うかな」

彼女は上着の下のホルスターからピストルを抜くとレヴィンに向けて続け様に三発撃った。レヴィンは咄嗟に身体を反らしたものの、反応が鈍く避ける事が出来なかった。撃たれた衝撃で彼は排気ダクトにぶつかり、その中に落下しそうになったが、辛うじて淵を掴んで留まった。口の奥から熱い血が込み上げ、唇から滴り落ちる。内臓がヤラれた証拠だ。サラはもう一度レヴィンへ銃口を向けた。

「サラッ……お前……」

「どうして避けられなかったのか？ どうしてサラが？ この傷は致命傷か？ 色々と考えているんでしょうね。可愛そうに」

サラはダクトの淵にしがみつくレヴィンに一歩近づいた。

「一つだけ教えてあげる。さっきアナタが飲んだ錠剤は血液反応を消すと言うより、ヴァンパイアの力を一定時間無力化する薬なの。」

この薬は私達ヴァンパイアにとっては脅威であり、最高の武器になるわ」

「自分の事を…ヴァンパイアと…言ったな。」

「あまり喋らない方がいいわよ。人間の身体はか弱いからね。」

サラはレヴィンが瀕死だと判断し、一度銃口を下ろした。

「半ヴァンパイアがハンターを気取ったところで、所詮私達ヴァンパイアに適う相手ではないの。私は間違っていた。ハンターは人間社会を護る希少で尊い存在だってね。でも現実はヴァンパイアが支配する世界にこびり付いたただの埃なのよ。ヴァンパイアこそが、世界を支配するに相応しい存在。人間の時代はもうじき終わるのよ。私は儀式を受け、ヴァンパイアとして生まれ変わるの。私がクランで地位を得るにはヨハンの首がどうしても必要なの。悪く思わないでね」

再び銃を構えるサラ。

「今なら人間として死ぬるのよ。ありがたく思いなさい」

一発の銃声と共にレヴィンはダクトの中を落下していった。

## 第6夜 裏切りの掟(1)

雑居ビルの壁面の中部内面を縦に伸びる大きな排気ダクト。その中腹にレヴィンは血まみれになって横たわっていた。彼の体は、大きな排気ダクトを塞ぐように備え付けられた頑丈な鉄格子に叩き付けられたお陰で最下層までの落下を免れたが、その衝撃で体の骨が何本か折れ、これ以上の身動きは難しかった。彼はゆっくりと自分が落ちてきたダクト上部を見上げ、サラが追撃に來ない事を確認した。

「この有様じゃあ、追撃の必要はない、か……」

レヴィンは、試しに悠里へテレパシーを送ってみようと試みたが、悠里からの応答はなかった。サラに飲まされた薬がまだ効いているようだ。薬の効き目が切れれば、サラの裏切りを悠里へ伝えられるが、自分の命がその時まで持ち堪えられるかレヴィンには分からなかった。

もし生き永らえたとしても、事態は最悪の方向へ進んでいるだろう。悠里はサラを慕っている。サラが彼女を騙して殺害するのは簡単なことだ。自分と同じように、もしくはそれ以上にあっさりと消されてしまうだろう。悠里が死ねばミカも死ぬ。こんな結末が待っているのなら、あの時無理にでもミカを人間に戻しておけば良かった。レ

ヴィンはそう考えると心が痛んだ。サラが組織を裏切った事もレヴィンを大いに戸惑わせたが、全てが手遅れだった。彼はハンターとして生きる事を決意した時、自分は壮絶な戦いの果てに命を落とすだろうと決めつけていた。だが、実際は古びた雑居ビルの油塗れの配管の中で、自分の無力さと不安に苛まれて死んでゆくのだと諦めるしかなかった。

ゴソゴソと音がして排気ダクトの支線から大きな溝ネズミが顔を出した。暗闇に光る二つの目。身体が人間の状態では、吸血など無意味だ。それにネズミ一匹の血液量では、この致命傷を癒す事もできない。

『…………人間として死ぬるのよ…………』

レヴィンはサラの言葉を思い出すとゆっくりと瞳をとじた。

サラはレヴィンの鼓動が弱く小さくなっていくのを確認すると、倉庫の屋根裏の床を突き破って飛び降りた。天井から降りてきた彼女を見て、八人の男たちは片膝を付いて従順な下僕が主の指示を待つ姿勢をとった。彼女はその様子を満足そうに眺め、自慢のブロンドヘアーをゆっくりとかき上げた。

「一人は仕留めたわ。次の作戦へ取りかかりましょう。悠里さえ始末すれば、ヨハンの首にも手が届くというもの。さあ、各自持ち場へ。あなた達のヴァンパイア反応を解放しましょう」

サラの言葉に弾かれて男たちは一斉に走り出した。

数分後。悠里は突然現れたヴァンパイア反応を感じ取って飛び上がった。ほぼ同時にそれを感知したミカも立ち上がる。二人は屋上から廊下へ繋がる鉄の扉へと疾走し階段へ向う。階段を猫のように滑降しながら意識を飛ばして彼らの位置を感知してゆく。サラ達が潜入しているビルに八人。ヴァンパイアだ。サラとレヴィンの反応はまだ無い。

(サラ！レヴィン！！ ヴァンパイアよ。聞こえる？)

応答無し。悠里はすぐ後ろを付いてくるミカに向かって叫んだ。

「あなたからも呼び掛けて。そして絶対に私から離れないで」

「はい！！」

ミカの呼び掛けにも二人は応じなかった。突然現れた焦燥感に心を揺らされながらもミカは必死に走った。そして、血の力を使って疾駆する悠里の背中を追いかけながら思った。自分はもう被害者じゃない。駆け出したとか、初めての任務だとか、そんな不安はもう頭の中から消えていた。ヤツらがいるビルを見つめ、返事はないが聞こえているかも知れないレヴィンに向かってただ一言、「待って」と小さく呟いた。

路地裏の角を何度も曲がり、二人はレヴィンとサラが潜入した古い雑居ビルの前に辿り着くと裏手の非常階段を上り始めた。ビルの内部を上がって行くよりもこちらの方が視界も広く安全だ。

悠里は血によって鋭く研ぎ澄まされた感覚を周囲に広げながら少しずつ慎重に階段を登った。襲撃もなく最上階へ到達するとあたりはすっかり暗くなり始めていた。夜になったからと言ってヴァンパイアの力が強くなる訳では無い。日光を気にせず自由に動き回れる、ただそれだけの事。でもそれは、空腹で涎を垂れ流した獰猛な狂犬が檻から放たれたようなものかもしれない。屋上の倉庫の入口を視界に捉えながら悠里はミカへ言った。

「あの中に八人。まだレヴィン達の反応はないわ。確実に言えることは、あの倉庫の中には何かしらの罠があるって事ね。ミカ。あなたは自分の身を守ることを最優先に考えて行動しなさい。逃げるべ

きだと判断したら一人でも逃げるのよ。いいわね。」

自分だけ逃げる。返事に戸惑うミカに悠里は微笑んで付け加えた。

「大丈夫よ。今まで通り今日も乗り切ってみせるから」

「はい」

悠里の瞳に微かな不安の色を感じて、ミカは精一杯の笑顔で応えた。

二人は再び臨戦体制の構えで倉庫へと歩き始めたその時。倉庫の入口が開いて中から二人の男が現れた。揃いのダークスーツにサングラス。彼等は緩やかな歩みでこちらへ近づくと、悠里とミカの警戒領域ギリギリのところで立ち止まった。サングラスの奥の視線が二人を捕える。ビルの谷間から風が舞い上がり四人の間を通り抜けてゆく。ミカは微かな死臭を感じ戦いに備えて血の力に意識を集中させた。

「ようこそ。主がお待ちかねだ、中へ来るがいい」

一人の男がそう告げると、男達は倉庫の入口へと歩き出した。ここは行くしかない。悠里はミカに向かって頷くと倉庫に向かって歩き始めた。両開きの鉄扉を潜り倉庫の中に入ると直ぐに、悠里達は影の中から現れた四人の男達に取り囲まれた。彼らはサングラス越しに前方を見据えたまま悠里達と同じ歩幅で歩きだした。彼らはまるで要人を守るSPの様子に二人を中心に広がる六方星の陣形を保ちながら奥へと進んで行く。最初に出迎えた二人が前方を歩き、あとから現れた四人は左右に一人ずつ、そして背後に二人。

そして、倉庫の奥、前方の暗闇に佇んでいる二人の姿が見える。殺気も生気も感じない彼らは紛れもないヴァンパイアだ。反応があ

った八人は全員現れたが、レヴィンとサラだけが見当たらない。悠里はこの緊迫した状況の中で彼らの行方を突き止めたかったが、先ずは八対二という不利な状況を打開することに全神経を集中させなければならなかった。

ダークスーツの一团に囲まれながら、悠里とミカは倉庫の奥に立つ二人の男の前へと辿り着いた。彼らもダークスーツに身を包んでいたが、サングラスは掛けておらず、一人は白髪姿でいかにも学者といった痩せた風貌で、もう一人は学者というよりも恰幅の良い弁護士といった雰囲気だ。

「ようこそ。裾川悠里、それから咲月ミカ。私がリオン・グラハム。彼はロイ・マッシュューズだ」

挨拶をしてきた二人は血液銀行から離反した二人とみて間違いない。ヨハンの事務所で飲んだDNAサンプルと同じ血の匂いがする。リオンと名乗ったのは学者風の痩せた老人だ。

「さて」

再びリオンが話し出した。

「早速だが本題に入らせてもらおうよ。我々はヨハン・スタンクラウドの首を頂きに仙台へやって来た。ご存じだとは思いますが、われら二人は血液銀行からの手土産を持参し、ロキアへの接触を試みた。なぜか？」

リオンは悠里を見て、ミカを見つめ、返事が無いのが寂しいとでも言うように小首をかしげて肩をすくめて見せた。

「君たちハンターは未だに自分達が世界の均衡を護る尊い存在だと

勘違いしているようだ。だが、実際はどうだ？ ヴアンパイアの数は減ったか？ 犠牲者の数は？ 全てはヴァンパイアの思いのままにコントロールされているに過ぎんだよ。均衡をもたらしているのは君達ではない。我々ヴァンパイアだ。」

リオンは暗い倉庫の中をゆっくりと歩きながら続ける。

「私も昔はハンターの一員として戦った。そこに正義があると信じてな。人間を護り、ヴァンパイア達の台頭を防ぐ。そして表世界の秩序を保護するのがハンターだと。しかし、ハンターに守られている今の人間達に本当にその様な価値があるのだろうか？ 数世紀前の人類は柔軟な発想と厳格な秩序を重んじる精神を持ち、素晴らしい文明を築いていた。だが、その文明はゆっくりと彼らの欲望を膨張させ、人類を確実にと蝕んでいった。彼らは自ら創り出したぬるま湯に浸かり過ぎ、今では目も当てられぬ程に墮落していった。」

リオンは立止まり、悠里を見据え続けた。

「もはや人類は自己の欲望のみを追求するだけの低俗な動物に成り下がった。この数世紀で人類は理想と現実を見失ったのだ。やがて人類は舵を取り間違い、世界は混沌へと向かうだろう。彼らはもはや我らが護るべき同胞ではない。人類よりも優れた力を持ちながら彼らの影と成っていた存在。ヴァンパイアこそが、これからの地球の支配者に相応しいのだ」

想いをぶちまける彼は高揚し、悠里の目の前で拳を握り締めてそっとう叫んだ。

悠里は一步後ずさりながら冷静に状況を探っていた。レヴィンやサラの血液反応は無いはまだ。あの二人が同時にこの逃亡者達にやられるとは考えられなかったが、いざと成ればミカと二人で切り抜

けなければならぬ。リオン達がサラとレヴィンの事に全く触れない事も疑問だ。そう考えると、二人はまだどこかに潜んでいるのかも知れない。可能な限り時間を使って、状況を探るべきだと悠里は思った。そしてリオンへの反論を唱えた。

「たとえ人類が墮落してしまったとしても、力と恐怖による支配なんて間違っている。人間を家畜のように貪る彼らが、人間のように繁栄する事ができるのかしら。人類は理不尽な掟で縛られるような世界を望んだりはいしない。反発する人類との大きな戦いを招いて命を粗末にするだけよ。それに、彼らの心も秩序も、まだ死んではいない」

「幼稚な理想論だ。もっとシンプルに考えたまえ。ヴァンパイアにも心と秩序はある。力のある存在が、なぜ世界を支配してはならないのか？」

リオンは再び悠里とミカの瞳を覗き込んだ。

「そもそも貴様らは、なぜ頑なに人間の側に立とうとするのだ？」

「それは、私が人間として生まれ、生きたからよ。その頃の自分を今でも憶えてる。そして、これからも絶対に忘れたりはいしないわ」

その時、悠里はサラの血液反応を感じた。天井裏だ。これでサラとタイミングを合わせて一気に彼等を仕留められる。ミカもサラの存在に気がついていようだ。後はレヴィン。彼もきつとどこかに潜んでいるに違いない。悠里はリオンから視線を外さずに意識を飛ばして、ダークスーツの手下達の位置を確認し、血液を体の隅々に行き渡らせようと、静かに息を吐いた。

「裾川悠里。その能力は高く評価していたが、残念だ。君とはここで別れだよ」

リオンが牙を剥いて襲いかかろうとしたその瞬間、天井裏から一発の銃声が響いた。

## 第6夜 裏切りの掟(2)

むせ返るような悪臭がこもるダクトの中、一匹の大ネズミが暗闇に目を光らせながら、冷たくなつた血液を舐めていた。その独特な血の臭いに引き寄せられたネズミは彼だけではなく、ダクトにできた血の池の向こう側から、もう一匹のネズミが現れて血を舐め始めた。

先に血を舐めていたネズミは後からやって来た横取り者を不快に思い、牙を剥いて激しく威嚇した。二度三度威嚇した後、相手に立ち去る意思が無いと分かると、彼は相手の隙を見て飛びかかった。二匹のネズミは血だまりの中央で牙を剥き、爪を立てて争った。

後から現れたネズミが身体能力の差を見せつけ相手を圧倒し、トドメを刺そうとしたその時、ダクト上部の破れた金網の上から突如、血塗れの猫が襲いかかった。猫は一撃で優勢だった方のネズミを気絶させると、天敵の奇襲に慌てて逃げようとするもう一匹のネズミの咽元へと噛みついた。彼は捕らえた獲物がカラカラに干からびるまで吸血すると、満足げに舌舐めずりをした。そして、みるみる塞がってゆく体の傷跡を前足で摩ると、気絶しているもう一匹のネズミの咽元にゆっくりと鋭い牙を押し込んだ。

天井裏からサラが放った弾丸は、悠里に襲いかかろうと牙を剥いたりオンの心臓を背後から撃ち抜いた。彼は狙撃された衝撃をこらえる為に右足を前に踏み出したが、一瞬のうちに灰化し始めていた彼の右足は、身体の重みを支えることができなかつた。リオンは右手に持っていた銃を放し床に手をつこうとしたが、灰となって散り始めた指先から銃が崩れ落ち、カランと床に転がった。

彼は自分を撃ち抜いた相手を確認しようと背中越しに首を回らした。長い金髪が視界に入ると同時に、彼の頭は首からもげ落ちて灰

となった。主を失くした身体は瞬く間に塵となり消滅した。  
相棒の死を目の当たりにし、身の危険を感じたロイが素早く銃を  
構えてサラを牽制する。

「サラ、お前なんて事を！」

「サラ！！」

サラの無事を確認して悠里が叫んだ。

天井から舞い降りたサラはロイへと銃口を向ける。

「悠里。私、レヴィンを救えなかったの」

「え……」

ミカが愕然とする。

「ゆるして……ごめんなさい……」

サラは溢れ出る涙を抑えながら、銃口をロイに向け構えなおす。  
そして、慎重に狙いを定め、彼を中心とする円を描きながらゆっく  
りと横へ歩んだ。サラはロイの心の中に潜む脅えを感じて、内心ほ  
くそ笑んでいた。彼はここまでよくやってくれた。裏切りの相棒と  
しては物足りなかったが、捨駒としては完璧だった。サラは歩みを  
止め、狙いを定める。震えながら銃を構えるロイの肩の向こうに悠  
里の姿が見える。この至近距離なら、避けることはできないとサラ  
は確信した。

「サラっ、何をしている、お前裏切るのか!？」

ロイが怯えた声で叫んだ。

「裏切ったのはアンタ達の方よ」

サラは呼吸を整えるために間を置いて、優しい声で付け加えた。

「できる事なら、貴方とは最後まで共に闘いたかったわ。サヨナラ……」

それはまるで、ロイではない、別の誰かに向けて発せられているかの様に響いた。

サラの声色がおかしい。悠里がそう感じた瞬間、サラはトリガーを引いた。

ミカはサラが発砲の瞬間に手首をひねり弾道を変えるのを見た。そして弾丸は悠里の心臓を貫き、その衝撃で悠里の体が後ろへと吹き飛ぶ。突然の出来事に戸惑う悠里の瞳。彼女の口元からは血が吹き出し、白い肌を赤く染めた。自慢の長い黒髪は乱れて、血に濡れた頬にベツトリと張り付いた。

「嫌あああああつ！」

絶叫する自分の声で、ミカは我に返った。

「……共に闘いたかったわ。サヨナラ……」

一瞬だけ彼女の垣間見た未来が、今まさに起きようとしていた。その言葉と同時に、ミカは思い切り悠里へと体当たりをして彼女を突き飛ばした。悠里はバランスを崩して床に倒れたが、放たれた銃弾はミカの体を貫通して倉庫の壁に突き刺さった。ミカの体は被弾の衝撃で木葉のようにくるくると回転しながら床に落ちた。

逃げようとしたロイはサラへ向け二発発砲したがどちらも命中させることができなかった。彼は出口側にいた彼女の部下二人の眉間に銀弾を撃ち込んで灰にさせたところで、サラに後ろから脳天を撃ち抜かれ灰となって崩れ落ちた。

残りの彼女の部下たちは一斉に悠里めがけて発砲する。彼女は床についた手の力だけで一気に天井まで跳ね上がりながら応戦し、黒服を二人仕留めた。それを見たサラは悠里の着地を狙って三発引き金を引いたが、悠里はサラの放った弾丸の起動に合わせて発砲し、互いの銃弾は空中でぶつかり、粉々に砕け散った。

サラは被弾して倒れているミカにトドメを刺そうと彼女の頭部に狙いを定めた。引き金を引く指に力を込めたその時、サラの右手は切断され、手首は銃を握り締めたまま床に転がった。床にはダクトの錆びついたファンの羽根が突き刺さっていた。

「聖水で聖別したダクトのファンだ。傷口から灰にならないところを見ると、お前さんだけはまだヴァンパイアになっていなかったようだな。まったく、抜かりの無い嫌な女だぜ」

「レヴィン。貴様！」

サラは驚きの声を上げてレヴィンを睨み付けた。

「裏切り者。お前だけは許さねえ！！」

不適に笑うレヴィンの銀髪が逆立ち、その瞳の奥が赤く光った。

## 第6夜 裏切りの掟(3)

レヴィンは怒りにまかせサラに向けたピストルを連射したが、彼女は全ての弾道を予測し身を翻して逃れた。自分を死の淵に追いやったサラの裏切りと、床に横たわるミカの姿を見て苛立ちを抑えきれない彼の弾道は単調で、正確さを欠いていた。

サラは銃弾をかわすその勢いに乗って倉庫の壁側まで飛び跳ねると、壁面を左手の掌で突き、壁に穴を開けて夜の空へと飛び出した。一羽のカラスと成って滑空するサラを追ってレヴィンもオオルリへと姿を代えながら埃の舞う庫内を突っ切って闇夜へと消えていった。悠里は床に刺さっていたファンの羽根を素早く引き抜くと、ミカの元へ飛んだ。残りの黒服2名が倒れたままのミカにとどめを刺そうと発砲したが、悠里が一瞬早く彼女の身体を掴んで物陰へと隠れた。コンテナの陰に横たえた彼女の体はピクリとも動かなかった。彼女が腹部に受けた傷は深く、先ほどまで倒れていた場所には大量の血溜まりができていた。悠里は、緊急信号のテレパシーをヨハンに送り、ミカの隣に跪いた。

「ミカ……」

悠里の呼びかけに、ミカは一瞬だけ苦しそうに眉をひそめたが、瞳は閉じたままだった。黒服の弾丸が悠里の肩をかすめる。まずは残りの黒服達を始末しなければ。

悠里は立ち上がると、倉庫内の暗闇にブーメランを投げるようなフォームでファンの羽根を投げた。レヴィンが聖水をかけて聖化したファンは風をきる微かな音を立てながら倉庫の天井高く消えていった。

悠里はミカと隠れていたコンテナの影から、二人の黒服の視界に入るようにゆっくりと通路へでた。彼女の姿を捉えた下級ヴァンパ

イアたちは、同時に銃を構えると一斉に彼女を撃ち始めた。悠里は  
一歩ずつ前に歩きながら、撃ち放たれた弾丸に向け素早く、そして  
正確に発砲し、彼らの撃った全ての弾丸を空中で撃ち落とした。そ  
して、弾丸が尽きると彼女はジーンズのベルトに挟んでいた小さな  
短銃を抜き、彼らの両肩を撃ち抜いた。ヴァンパイア達は持ってい  
た銃を取り落として一歩後ずさった。彼らの耳に微かな風の音が聞  
こえたその時、ファンの羽根が黒服二人の首を切断し暗闇へと消え  
ていった。始末した獲物の最後を見届けずにミカの元へ走り出した  
悠里の背後で、切られた首は床に落ちる前に灰となり、胴体はサラ  
サラと音を立てて崩れた。

「ミカ!!!」

ミカの元に駆け戻った悠里は彼女の名を呼んで首筋に触れた。弱っ  
ているものの脈はまだしっかりとしていた。肌に触られた感覚で、  
ミカはゆっくりと目を開けた。

「悠里さん……へへ……私、役に立ったでしょ……」

不安げな悠里の表情に気が付いたミカは強がって笑って見せた。  
ミカが突き飛ばしてくれなければ、悠里は確実にサラに殺されてい  
た。彼女を庇って重傷を負ったミカ。その傷は深く、致命的だった。  
ヴァンパイアと違い、致命傷を負ったヴァ半吸血鬼マイラは人間と同じよう  
に死んでしまうのだ。

「ミカ、自分を守る事だけ考えなさいって言ったのに」

悠里は声の震えを隠すことができなかった。

「でも……気が付いたら、動いちゃってた……」

「ミカ……ゴメンね、私……」

悠里は血に濡れたミカの右手を手に取ると、きつく握り締め手の甲にキスをした。閉じた瞳から涙が流れる。

「だって、悠里さん、私を……救ってくれたから」

ミカは苦しそうに首を傾げるとにつこりと笑った。細まった目じりから涙が溢れる。ミカはヴァ半吸血鬼マイラとして生きることを決めたあの日から、こうなる事は覚悟していたつもりだった。だから、死ぬ事なんか怖くないんだと自分に言い聞かせた。この涙は、そう、唐突な出来事に、ただただビツクリしているだけなんだと。

「悠里さん……私、死んじゃうのかな……」

「大丈夫よ、今にヨハンが着てくれるから」

搾り出すような声で応じる悠里。ヨハンと言えども、致命的な傷を負ったヴァ半吸血鬼マイラを治療するのが困難な事を、悠里はよく分かっていた。彼が駆けつけるまで何としても持ち堪えさせねば。

「ミカ、私の血を吸いなさい」

横たわるミカの頭を抱え起こして自分の左手首をミカの口元に差し出す悠里。

「……悠里さん。私、シユンに会いたいよ」

焦点の合わない視線を空に向けるミカ。

「駄目よミカ！ さあ、早く私の血を吸って」

「シユンはね……とっても優しいんだよ。……だから私ね、もう一度……」

ミカの首が力なく横に傾いた。

「駄目！！」

悠里はミカの肩を揺すり呼び戻そうとしたが、ミカの身体は力なく揺れるだけだった。

「ミカツ、お願い、戻ってきて」

悠里は彼女の脈音が急激に弱まっていくのを感じ取った。二人を包み込んだ絶望はあまりにも突然で、悠里はなす術も無くミカの手を強く握りしめると、彼女の胸に額を押し当てて、泣き崩れた。

## 第6夜 裏切りの掟(4)

目の前を飛ぶ一羽のカラス。その影を追ううちにレヴィンは冷静さを取り戻していた。先程までの怒りは、今や大きな絶望と深い後悔の念へと変わり、彼の心を重く掴んで闇の中へと引きずり込もうとしていた。深い闇に飲み込まれそうな思いを断ち切るように、レヴィンは目の前の獲物に集中していた。

ミカの血の反応が今にも消えてしまいそうだ。

もしかしたら、この距離と激しい旋回の繰り返しで見失かもしれない。自分の感知能力には自信のある彼は、ミカの反応の弱さを否定するための理由を考えずにはいられなかった。しかし、どのような理由を被せたとしても、自分の感覚を騙すのは不可能だった。

点々と灯るビル街の明かりを突き抜け、サラとレヴィンは西へ続く幹道のトンネルへと入った。朝夕は渋滞で滞るこの西道路も、夜の交通量は少ない。オレンジ色の電光の中を疾走する二人。

レヴィンは、サラの後ろを追いながら意識を集中した。今は目の前の裏切り者を倒すことだけを考えなければ。サラはベテランのハンターであり、かつての仲間だ。お互いの手の内は分かりきっている。用心に用心を重ねても、やり過ぎという事は無いだろう。

一方、サラの逃避行は限界を迎えていた。レヴィンに斬られた右手は、カラスとなっても修復されることは無く、これ以上逃げ回るのは不可能だった。そして、彼女は気付いていた。レヴィンが一定の距離を置いて追ってきている。それはつまり、この手負いの身体を消耗を待っているのだと言うことを。

彼女はトンネルを抜けると同時に上空高く飛び上ると、前方を走る一台の車を見つけた。眼下の白いスポーツカーはガラガラの道路

を楽しむようにスピードを上げ西道路を飛ばしていた。

サラは力を振り絞ってその車目掛けて急降下をすると、運転席のガラスを突き破って車内へ飛び込み、瞬時に猫となった。彼女は運転する男性の首元へ噛み付くと、驚いた男性がハンドル操作を誤りそうになるよりも速く、サラは人間の姿に戻ってハンドルを押さえた。そして彼女は男の血を吸いながら、彼の体の上に覆いかぶさって、彼の足の上からアクセルを思い切り踏み込んだ。エンジン音を響かせながら加速する車の中で、サラは彼の血を吸い尽くすと、男のシートベルトを外し運転席のドアを開けて男の死体を放り投げた。手首のない右手で器用にドアを閉めると、口から滴る血を右手でふき取り、サラは不適に微笑んだ。

レヴィンは投げ出された死体を目指して降下し人間の姿へと戻った。血を吸い尽くされ、水分を失った体は触診するまでも無く息絶えているのが判った。彼女は今日二つ目の掟を破った。

【裏切り】と【罪無き人間への吸血】。レヴィンは首にぶら下げている銀の十字架ネックレスに触れ、祈るように呟いた。

静かなる銀月

最初の母なる黒のマリアよ

罪と裏切りの血を貴方に

古の宿命さだめにより

我、血を分けし兄弟を

殺める事を許したまえ

瞳を閉じて囁く彼の声に応じて、生暖かい風がふわりと流れる。

そして、【声】が、彼の頭に直接語りかけた。

親愛なるわが子よ 願いを許しましょう

宵が明けるその時まで

復讐が成されれば其の者を  
成されなければ貴方を  
夜明けと共に召しに参ろう

ヴァ半吸血鬼マイラの掟では、裏切りは勿論、同胞殺しも固く禁じられて  
いる。掟を破った者はヴァンパイアよりも上位の敵とされるが、そ  
の裏切り者を始末するのもまた同胞殺しとなる。よって彼らはその  
同胞殺しの許しを【声】の主を得なければならず、与えられる期間  
は【宣言】をした一晚のみである。夜が明ければ、裏切り者を引き  
取りに【声】の主が現れるが、【宣言】したものがその時までに関  
手を仕留められなければ、宣言をした者が【弱き者】として命を奪  
われることとなるのだ。

レヴィンは生ぬるいその風が吹き去ると、静かに目を開けた。そ  
して彼は足もとに横たわる死体に祈りを捧げると、逃走する白いス  
ポーツカーを追って走り出した。

血の力でドライブし勢いを増した彼は瞬く間にターゲットとの距  
離を縮めてゆく。限界まで加速して跳躍すると、レヴィンはハヤブ  
サとなって上空に舞い上がった。そして、充分な高さまで上昇する  
と、サラの乗る車のテールランプ目掛けて一気に急降下する。サラ  
はレヴィンの追跡に気が付いていたが、右手を失っているため、無  
駄に反撃するのは上策ではないと判断していた。

「死に損ないめ。ギリギリまで引き付けて一発で仕留めてやるわ」

サラはレヴィンの急降下を感知し左手で銃を構えた。急速にレヴ  
ィンの反応が近づく。サラは感覚を研ぎ澄まして、血の力で瞬発力  
を最大まで引き上げた。上空より降りてくるレヴィンの反応は右寄  
り、あと二十メートル。右から運転席を狙う気か。そう判断したサ  
ラは小賢しい追手を撃ち殺すタイミングを計り始めた。あと十メー

トル……ハメートル……六……四……サラは大きく息を吸い込んで、  
運転席のドアを蹴破ると、真後ろまで迫っていたレヴィン目掛けて  
発砲した。

「死ね！！」

レヴィンはサラの構える銃口が見えた刹那、小さく左へと旋回し、  
そのまま猛スピードで走るスポーツカーの下へと潜り込んだ。サラ  
の放った渾身の一撃は暗い空へと消えていき慌てた彼女は車の床越  
しにレヴィンを狙い撃ったが、ハヤブサのあまりのスピードに命中  
させることができなかつた。レヴィンはそのまま一気に加速してサ  
ラの車を追い抜くと、宙返りをするように弧を描きながらフロント  
ガラスの前へ人間の姿で現れた。サラが銃を構えるよりも速く、レ  
ヴィンはサラの左手を撃ち抜いた。粉々にひび割れたフロントガラ  
スで視界を奪われ、サラはやむなく車から身を投げてアスファルト  
の上へと転がり逃れた。運転手を失った車はそのままのスピードで  
ガードレールへと衝突し、一瞬にして炎に包まれた。サラは気力を  
振り絞って立ち上がったが、爆発の炎で明るく照らし出された彼女  
の両脚に2発の銃弾が命中し、その場に崩れ落ちた。

レヴィンは横たわる彼女の元へ近づくと、自分を裏切ったかつて  
の友人を静かに見下ろした。サラは怒りに震え、瞳を赤く燃えあが  
らせもがいていた。

「いたぶって楽しいか。早く殺せ！！」

勝利を得たことで冷静になったレヴィンは、サラの墮ちた姿に悲  
しみを感じていた。

人間として生まれヴァ半吸血鬼マイラとなった者は、過酷な運命と引き換  
えに大きな力を手にする。姿を変え空を飛び、人間の視力では捉え  
られない程の速さで走ることもできる。しかし、その力は更なる欲

望を生み出し、ヴァマイラ達を更なる闇へと陥れる。仇敵であるヴァンパイアの力に魅せられ、堕ちていったヴァマイラはサラだけではないのだ。

「アンタ程の力があれば、ヴァンパイアの秘術なんて必要なかったのに」

レヴィンはそう言って彼女に一瞥を投げかけると、背を向けて歩きだした。前方から生暖かい風が吹き始め、辺りを重い闇が包み始めていた。

「レヴィン。お前にも分かる日が必ずやってくる。ヴァマイラの力など、彼らの前では無力なのだ」

サラの叫びに振り返ることなくレヴィンは歩き続けた。

心がバランスを崩せば力も弱くなる。力が弱ければ、より大きな力を求めたくなる。必要以上に力を求める事は、いつの間にか自分を追いつめて、心のバランスを更に脆く崩れ易いものにする。

「善極まれば悪となり、悪極まれば善となる。心と力のバランスもまた然り、か」

そう呟くレヴィンの横を一台の黒塗りの高級車が走り過ぎる。その車は赤々と燃えあがる大破したスポーツカーの隣に停車すると、ゆっくりと後部座席のドアが開いた。いつの間にか辺りには深い霧が立ち込め、チラツと振り返ったレヴィンの視線の先では、燃え上がる炎すら朧おぼろげげにしか映らなかった。

親愛なるわが子よ

この顛末 確かに見届けました。

この血は我、伽として召す事にいたしましろう

再び生温かい風がレヴィンを包む。

彼は二歩三歩、歩いて立ち止まると、革ジャンのポケットからタバコを取り出して口に啜えた。

ミカの事が心配だ。レヴィンは啜えたタバコをケースにしまうと、オオルリとなって空高く消えていった。

## 第7夜 サヨナラ・ベイビー

空が青く色付き始める。昼と夜が逆転する暮らしをしている彼らにとつて、明け方は一日の終わりを告げる夕暮れをのようなものだった。

青い夕暮れ。その静かな光は仙台の街をゆっくりと包み、木々はその暖かさを浴びて杜の都に健やかな息吹で満たしてゆく。市街地から遙か遠くの山林をも見渡せる高層ビルの最上階の病室で、ミカは呼吸器に繋がれベッドに横たわっていた。サラによって打ち抜かれた彼女の体はヨハンの応急処置により塞がれ、ヴァマイラが持つ驚異的な治癒能力で癒されていた。意識を無くしたまま眠り続ける彼女を心配そうに見守るミカの家族、そして、病室の入り口近く、家族とは少しだけ離れて座る一人の青年。彼は涙で腫れた赤い目でじっとミカを見つめていた。

「シユン君。少し休んだら」

ミカの母の呼びかけにシユンは少しだけ顔を上げると疲れた笑顔で答えた。

「僕は大丈夫です。咲月さん。ミカさんの意識が戻るまで、ここにいっても構いませんか？」

「ええ。ミカも喜ぶとは思いますが、あまり無理しないでね」

「はい。ありがとうございます」

少しの沈黙、病室に差し込む朝日に一同の視線が移る。その時、静まり返った病室のドアが開いて看護師が入ってきた。彼女は病室の

家族に会釈をした。

「点滴の交換にきました」

看護師は手慣れた手つきでミカの点滴を交換する。家族はその様子は何となく眺めていたが、やがてミカの父親が腕時計に視線を落として呟いた。

「もう七時か」

「そうだ、みんなで下のコンビニへ朝ご飯の調達に行きましょうよ」  
疲労した顔に楽しげな笑顔を作ってミカの母親が言った。

「じゃあ、僕は留守番していますよ。何かあるといけないから」  
留守番をかって出ようとしたシュンに看護師が言った。

「今は容態も落ち着いているので大丈夫ですよ。皆さんが戻るまで、私がお留守番してますから」

彼女は明るい笑顔で皆を安心させるように微笑んだ。一同は彼女に促されるように席を立つとずらずらと病室を出た。

「コンビニの向かいにあるカフェ。朝の焼きたてクロワッサンもお勧めですよ」

彼女の見送りにミカの母は少しだけ元気に笑って手を振った。

少しずつ赤みを帯びていく空の下、そのビルの屋上ではレヴィン

と悠里が、昇り来る太陽に背を向けて空を見上げていた。レヴィンがゆっくりと吐いたタバコの煙が静かに流れていく。朝日に気が付いた悠里が、もたれ掛かっていた手すりから離れて、手をかざしながら太陽を見つめる。朝の暖かい風が彼女の頬をなで、黒髪をなびかせた。

悠里は暫し日の光を浴びた後、何も言わずに屋上の鉄扉を開けると、下階へと階段を下りていった。ミカの病室から人の気配がなくなったのを感じた彼女は、彼女の病室へと向かったのだった。レヴィンは街のビル群に反射する朝日に目を細めて、啞えたままのタバコを深く吸い込んだ。タバコの先端が吸い込まれる空気に触れて赤く燃え上がった。

再び屋上の扉が開いて一人の女性が屋上に現れた。彼女は看護師の制服の上から暖かそうなダウンジャケットを羽織っていた。彼女の気配を感じたレヴィンは後ろを振り向かず口を開いた。

「やあ婦長さん。今から出勤ですか？」

婦長と呼ばれた中年女性は後ろ姿のレヴィンに向かってニコリと微笑んだ。

「そうよ。昨夜は大変だったみたいね」

彼女はそう言って手すりに寄りかかるレヴィンの隣に並んだ。

「家族にどこまで放したか分からんが、あと2週間は眠り続ける」

レヴィンは遠くを見つめたまま、そう呟いた。

「そのようね。家族に原因は何と？」

「さあな。その辺はヨハンさんがうまく言ってるんだろっよ」

「そう。」

レヴィンはタバコを携帯灰皿でもみ消すと、大きく伸びをして、あくびをした。

「どれどれ、オレはそろそろ帰るとします」

そう言っただけでレヴィンはポケットに手を突っ込み、少し猫背になって歩きだした。婦長は、歩き去る彼の後ろ姿を見ながら言った。

「彼女には会っていかないの？」

レヴィンは立ち止まり、振り返らずに言った。

「ミカには、人間に戻ってもらおう事にしたんだ。意識不明だったアイツ本人には相談なしの話だがね。だからミカが眠りから覚めても、オレ達の事は覚えてないのさ」

それを聞いた婦長は、レヴィンの心中を見透かすように優しく微笑んだ。

「彼女に忘れられるから、自分も忘れようと必死なわけね」

レヴィンは肩越しに振り返ると少しだけ笑った。

「彼女には才能があった。きっと腕の良いハンターになっただろう。でも、それはオレ達のエゴだったんだと思う。共に闘うことを選んだのはミカの判断だけれど、いつものように黙って人間に戻さなか

ったのはオレ達のミスリードだったんだ。もしミカが死んでいたら、人間を守るといふハンターの仕事としては失敗だ。彼女はまだ若すぎる、守られる側にいるべきなんだ。それとな……」

レヴィンは照れ臭そうに朝日に手をかざして続ける。

「例え何百年生きてたって、サヨナラを言うのは苦手なだけさ」

「そう。それはきつと……」

婦長は両手を上着のポケットに突っこんだまま、眩しそうに太陽を見上げ、楽しそうに笑った。

「ヨハンのジャガイモ嫌いと一緒に訳ね」

「そんなところだ」

二人は声を出して笑った。レヴィンは婦長に歩み寄って、レザージャケットの内側から銀の万年筆を取り出した。スタジアムでミカに預けた万年筆。彼は朝日を受けて輝く銀の光沢を満足そうに眺めてから、それを婦長に差し出した。

「これさ、お守り代わりに渡してやってくれないか。ミカが退院する時に、婦長からの退院のお祝いってことで。」

彼女は仕方がないわね、と言いたげに肩をすくめて万年筆を受け取った。

「預かっておくわ。退院の日に、見た事も無いパンクなイギリス人が万年筆を片手に現れる訳にはいかないものね。可愛い箱にでも入れてプレゼントするわ」

「サンキュー」

レヴィンにはっこりとほほ笑んで、婦長の腕をポンと軽くたたいた。彼女は2度3度と頷いて応えた。レヴィンはそのまま後ろ姿を婦長に見送られるようにして屋上を後にした。

朝食をたんまりと買い込んだ家族がカフェから出てくる。一同の顔に疲れはあるものの、出来立てのクロワッサンの香りと、紙コップ越しに伝わってくるコーヒーの温もりが疲れた身体を癒していた。

「ミカが元気になったら皆でランチでもしに来ましようね」

病院のあるビルへと戻る母親の楽しげな声の横を、レヴィンはずつむきがちに通り過ぎる。ふと立ち止まり、ビルのエントランスへ消えていく家族を見送ると、彼はミカが寝ている病室の窓を見上げた。

（随分と痛い思いをさせちゃったな。でも、楽しかった）

レヴィンは照れ臭そうに頬をぼりぼりとかいた。もう聞えるはずのないミカへ言う挨拶に、照れている自分が恥ずかしかった。

（ここでお別れだ。サヨナラ、ベイビー）

朝日が金色に反射する上層の窓に向かってそう告げると、レヴィンは、ジーンズのポケットに両手を突っ込んで、とほとほと背中を丸めて歩きだした。

悠里は呼吸器に繋がれて眠るミカの真横に立ち、彼女の髪を撫でた。ミカは一度だけ、誰かに答えようと首を窓に向けて動かし、何か言いたそうに唸った。

「大丈夫よ」

悠里はそう言ってミカの手を握った。暖かい。彼女はもう人間なのだ。悠里は感じた。彼女の中に自分はもう居ないのだと考えると悠里は胸が痛かったが、これがミカにとって正しい選択なのだ。彼女は自分に言い聞かせた。名残惜しさで動けなくなる前に、彼女は握っていたミカの手を放した。

「救ってくれて、ありがとう。私はミカの事は忘れないからね」

そう言ってもう一度彼女の髪を撫でた。ベッドの脇を離れ、立ち去ろうとした悠里だったが、言い忘れた事を思い出して立ち止まった。

「ミカ、シユン君と仲良くするのよ」

悠里は優しく微笑んで眠り続けるミカの頬を撫でると、静かに病室を後にした。

廊下に出て携帯の電源を入れると直ぐさまメールの蓄積を知らせるランプが光る。ヨハンからの指令だ。悠里はパチンと勢いよく携帯を閉じると、バイクを停めてある地下の駐車場目指して軽やかに走り出した。

## 第7夜 サヨナラ・ベイビー（後書き）

咲月ミカ編終了です。

最後までお付き合ひ頂き、誠にありがとうございます。

次回からはまた別のお話を考えておりますが、とりあえずひと段落することができました。皆様から頂いた沢山のアクセス数だけが、私の活力となりました。感謝です。

誤字脱字も多く、描写もイマイチではございましたが、ここまで感想など、一言でも頂けると励みになりますので、宜しく願います。そして、今後もBLUE DAWNを宜しく願い申し上げます。

追伸。ミカの登場は今回が最後ではございません。お楽しみに！

死術の書：館の主（前書き）

今回は外伝です。

いずれは本編と合流する！？ かもしれない。

乞うご期待でございます。

## 死術の書：館の主

東南アジア独特の蒸し暑い風がジャングルを吹き抜ける。

木々の合間から見える夜空には、少しだけ欠けた月が、灰色に薄く広がった雲のベールの奥から細い獣道を微かに照らしていた。夕刻のスコールで濡れたままの岩や木々の葉が、やんわりと降り注ぐ月光を受けてぼんやりと光っていた。

山道を歩く二つの人影、前を歩く青年は身なりも貧しく、膝や頬を泥で黒く汚し、時折躓つまずきながら歩いていた。

「旦那。これだけ歩けば村から明かりは見えねえはずです。そろそろランプを点けてもいいでしょ？」

彼の後ろを歩く旦那と呼ばれた長身の老人は、前を進むガイドとは対照的に、黒のスーツの上から薄手の焦茶色のトレンチコートをはおり、優雅に革靴すら汚す事無く歩いていた。若いガイドはこの老人を気味悪く思っていたが、前夜に支払われた前金の額の大きさに負け、彼をこの密林の奥の廃屋に案内する事を承諾した。あれだけの大金があれば村を出ても一生暮らしていける。だからこそ、後ろを歩く老紳士の『絶対に誰にも話してはいかん。』と言う約束にも従順に従っていた。もし誰かに話でもしたら、折角の大金を無心されるのが関の山だった。

「うむ。よかろう」

老人は暫く空を眺めてから、ガイドに点灯の許可を与えた。それを聞いた若者は、慣れた手つきでランプに火を灯した。あたりの景色がぼんやりと照らし出される。若者は無意識にチラリと老紳士の

左手を盗み見た。彼の左手の中指には、深紅に輝く宝石が埋め込まれた金の指輪が光っていた。もう少しだけこの老人に付き合えば、あの指輪が我が物になる。彼は老人の前をゆっくりと歩きながら嬉しさを噛みしめた。

深夜にという不思議な条件付きではあったが、廃墟に老人を案内するだけで、村で一働いても稼げないような大金を前金で手に入る事ができ、案内が終われば、素晴らしく魅惑的なあの指輪が手に入る。老人の指輪は何とも逆らい難い不思議な魅力を放っているように彼は感じていた。

若者はランプを掲げ、暗がりには浮かび上がった二股に分かれた坂道を見極めると、左へと進んだ。若者は、一目あの指輪を見た時から、まるで愛する者の寝顔に魅入られるように、指輪の魅力に魅せられていた。振り返り手に取ってその冷たさを味わいたい。そんな感情を払いながら、彼は山道を歩み進んだ。

それから二時間ほど歩き続け、二人は目指していた廃墟の門へとたどり着いた。かつては白く輝いていたであろう門柱は黒ずみ、左側の柱は中ほどから折れて地面に埋まっている。門扉は朽ちたのか取り外されたのか跡形も無く、草木の生い茂る密林となった庭園への口を大きく開けていた。老紳士は満足げに顎鬚を撫でながら左右を見渡した。庭園の外壁は全て崩れ去っており、そびえ建つ門の大きさを際立たせてみえた。暗い密林の中に浮かび上がる廃門は異界へと通じるゲートの様な雰囲気だった。

「旦那。ここから、この一本道を進めば直ぐに御屋敷に辿りつけます」

若者は崩れた門が放つ陰鬱な雰囲気には怖気付き、何とかここで引き返させて貰えないかと思い、話を切り出した。老人は彼の心の中を覗き込むように彼の眼を覗き込む。背の高い老人に見下ろされる

若いガイドは堪らずうつむいて、老人の答えを待った。

「屋敷が見えるまで案内するのだ」

ガイドは渋々老人の意見に従った。

二人は門の中へと進む。昼間でさえ数えるほどしか訪れた事がない廃墟。薄気味の悪い老人とこんな夜中にここへ足を踏み入れた事を若者は少し後悔し始めていた。彼は名残惜しそうに、門の方を振り返ったが、あと少しの辛抱だと自分に言い聞かせ、先を急いだ。

屋敷へと続く道を暫く進むと、二人は池の畔ほとりへと出た。池の向こうには朽ち果てた屋敷がランプの明かりで不気味に浮かび上がった。

「うむ。では案内はここまでとしよう」

老人はそう言って、目じりを下げてほほ笑んだ。

若者は安堵に胸を撫で下ろすと、道端に生えていた大木の枝にランプをぶら下げた。それから、どうやって報酬の話を切り出そうかと言葉を詰まらせていると、老人は自ら指輪を抜いて若者に差し出した。

「旦那。ホントに頂けるんですね。ありがとうございます」

若者は満面の笑みで両手を差し出す。

「礼を言うのは余の方じゃ。この屋敷は永久とわに余の住処となり、この指輪は永久とわにお前の指で輝くであろう」

老人が差し出した金の指輪を若者が両手で受け取ろうとした瞬間、老人は指輪を摘まんでいた指を放した。指輪は輝きながら地面へと落ちた。

「あつ……」

落ちた指輪を拾い上げようと若者が屈みこんだその時、刀が一閃し風を斬る音と共に、若者の首が地面に転がった。頭を失った若者の身体はそれに気付かないまま、何事も無かったかのように指輪を拾いあげると、誇らしげに左手の中指に指輪をはめ込んだ。そして、ふらふらとランプが掛けてある大木の方へ歩くと、ランプの下にドサツと崩れ落ちるように座り込んだ。

老紳士はその一部始終を見終えると、足元に転がったガイドの生首を見下ろした。そして、彼が野良猫を追い払うように右手を払う仕草を見ると、ガイドの生首はコロコロと地面を転がって、持ち主の身体にぶつかって止まった。老人はそんな事にはあまり関心が無く、暗闇でもはつきりと見えるヴァンパイアの目で自らのアジトとなる廢墟を見渡していた。

その洋館は、時代の流れから抜け落ちたように閉ざされた佇まいたたずまいであつたが、朽ち果てた外観は今もなおその莊嚴さを失つてはいなかった。かつては白亜に輝いていた外壁は門と同様に黒澄み、雨の後が所々に出来ていた。地面から生え伸びた蔦つたは屋根まで届き、その屋根を覆う赤い洋瓦は、夜の微かな月明かりに照らされて、冷えた溶岩のような赤と黒の文様を浮きだたせていた。

老紳士は軽やかに跳躍をすると一気に池を飛び越えて屋敷の入口へと降り立った。彼が玄関の古ぼけた外灯へ目配せをすると、そこにオレンジ色の火が灯った。そして、手をかざして玄関の扉を開けると、彼はしなやかに中へと足を進めた。その動作はもはや、先程までの老人のものでは無かつた。

彼は玄関ホール奥の階段を二階へと飛び上がり、振り返ってフロアを見下ろした。かつては社交パーティーでも行われていたである

う、かなりの広さだった。満足のいく館だと彼は顎鬚あごひげを撫でた。そして、彼が再び左手をかざすと、床に落ちていたシャンデリアゆつくりと天井へと浮かび始めた。傾いていたシャンデリアは、回転をしながら水平を保ち、ロウソクもないまま眩まはゆく光を放ち出した。ヴァンパイアは声高らかに叫んだ。

「死術を操る古のクラン、ゾーマの血族は、もはや余、独りとなった。しかしながら、マスターである余がおる限り、ゾーマの血は絶える事は無い。余はここで再興の同志を集め、余のクランを裏切った忌まわしいカリオーニヤの血族を根絶やしにしてくれようぞ」

高笑いをする老ヴァンパイアの瞳は、赤みを帯びた復讐の輝きを放っていた。

## 死術の書：スワン・ドライブ

月夜の晩。深い闇に覆われた密林の奥、忘れ去られ廃墟の門前に独りの少女が立っていた。

年のころは十六歳前後、ヨーロッパ系の美少女であった。彼女は赤みがかったブロンドをツインテールに結んで、赤地に白い一輪のユリの模様が入ったワンピースに、ヒールの高い赤色のミュールという場違いなスタイルで、不機嫌そうに大きく溜息をついた。

彼女が朽ちた門から中を覗き込むと、ゆらゆらとランプの明かりが近づいてくるのが見えた。やがて姿を現した明かりの主は、右手にランプを握り、左手には自分の頭蓋骨を持った首無し骸骨だった。頭蓋骨を持つ左手の薬指の深紅の指輪が怪しく輝いていた。

「屋敷が見エルマデ案内スル……」

ボーリングの球のように両目に指を突っ込まれたままの頭蓋骨が、カタカタと口を開いてそう喋ると、ぎこちなく歩き出した。彼女は吹き出しそうになるのを堪えながら首無しの後続いた。暫く歩くと、二人は屋敷が見える池の畔に着いた。

「案内八、ココマデダ」

骸骨は道端の大木の前で立ち止まった。

「素敵なお出迎え、どうもありがとう」

彼女は腰を屈めて頭蓋骨に顔を近づけると、につこりとほほ笑んで、屋敷の前に広がる池をふわりと飛び越えた。ヴァンパイアにとってこれくらいの軽業は造作もないことだった。

彼女が屋敷の入り口にたどり着くと、館の主は玄関の明かりを灯して来客を歓迎した。玄関扉へ続く数段の階段を上ると、独りでに扉が開いた。

(ようこそ参られた。中に入られよ)

何処からともなく声が聞こえ、彼女はその声に従って屋敷の中へと足を踏み入れた。玄関の奥に広がる大きなホールにはシャンデリアがあつたが、今は三本のろうソクだけに火が灯されていた。彼女は視線を送るまでもなく、この薄暗いホールの奥にある緩やかな螺旋階段の上に、館の主人の存在を感じ取った。

彼女はホールの中央まで歩み出ると、スカートの裾を摘んでバレリーナのような優雅さでお辞儀をした。

「仲間を探しているのは、アナタね」

無愛想に言い放つと、彼女は階段の上に漂う影を見上げた。屋敷の主は少女の高飛車な態度に苛立ちを覚えたが、顎髭を撫でながらまだ幼さが残る女ヴァンパイアを見下ろした。そして、彼女のその態度がいつまで持つのか楽しんでやろうという心持ちになると、彼はようやく口を開いた。

「名を述べよ、童女」

彼はあえて彼女を童女と呼んだ。傲慢な相手を子供扱いするのは彼の楽しみのひとつだった。

童女と呼ばれた彼女は高圧的な主人の言葉使いに思わず淡いピンクの唇を噛みしめた。

「ジョゼフィーヌ……と申します」

墜ちたとはいえ、克蘭のマスター相手に非礼な態度ではマズいと判断した彼女は、勝ち気な性格を押さえ込むことにした。

「うむ。余はゼルフア。死術を操る古の克蘭。ゾーマの君主である……そなたの事はジョジュと呼ばう」

(ジョジュ！ ママにだってそんな呼ばれ方されたこと無いのに)

ジョゼフィー又は克蘭マスターの慣れ慣れしさを鬱陶しく思った。しかし、彼女はここへやって来た目的をもう一度自分に言い聞かせて苛立ちを抑えた。今は仲間が必要なのだ。彼女自身の復讐の為にも。

「ジョジュ。身の上を延べよ」

ゼルフアは彼女のことを何年も前からそう呼んでいるかのような自然なニュアンスで話をきり出した。ジョゼフィー又は一瞬の間を空けてからコクリと頷いた。

「速さを尊ぶス・ナウドの克蘭の子でありました。しかしながら、親である騎士・更にその上の貴族諸侯はカリオーニヤとの抗争に敗れ、皆殺しとなり、私ひとりが流離う身となりました。」

「うむ。ス・ナウドには戻らんのか？」

ジョジュは俯いてつづける。

「戻る理由がありません。ス・ナウドとカリオーニヤは停戦協定を結びました。我が一族を生け贄として差し出すことを条件としてい

たのです。私は両クランに対して果たさなければならぬ復讐があるのです」

ジヨジユは小さい拳を握りしめて、ゼルフアを見上げた。

「なるほど。そして、お前はその復讐をする仲間を求めてここを訪れたと言っただな」

「はい……」

ゼルフアは小首を傾げてジヨジユを見つめた。

「ジヨジユよ。ヴァンパイアに成ってどれほどになる？」

「まだ、三年です」

「うむ。そうであろうな……」

ゼルフアは彼女の纏う闇のオーラに幼さを感じていた。そして、彼は思慮に耽りながらゆっくりと螺旋階段を下りてきた。ジヨジユは彼との距離が縮まるのを畏れて後ずさった。ゼルフアはフロアに立つと懐から眼鏡入れほどの大きさのレザーケースを取り出すと、ジヨジユの足元にポンと投げた。

「ジヨジユよ。幼いお前の為に、ひとつテストをしよう。そのケースの中には七本のナイフが入っている。その中の一本でも余の身体に触れることが出来れば、合格としよう」

ジヨジユは何かの罫でもありはしないかと、慎重にケースを取り上げ、指でコンコンと軽くケースを叩いてからゆっくりと蓋を開け

た。

「細工など無い。小娘相手に策などいらぬわ」

ゼルファは退屈そうに溜息をついた。ジョジュはケースの中に入っているナイフを一本だけ取り出した。シンプルなデザインの投げナイフで、柄の部分にはコウモリの彫刻が施されていた。ジョジュは意を決すると、残りの六本も取りだして、ケースを床に投げ捨てた。

「うむ。手加減は要らぬ。それから、余は攻撃せぬゆえ、お前は攻めることにのみ力を注ぐのだぞ」

そう言うときゼルファは左手を高く掲げ、素早く振り下ろしながら指をパチリと鳴らした。すると、その手にはいつの間にか現れた短いステッキが握られていた。驚いた表情を見せたジョジュに向かってゼルファは楽しそうに肩をすくめてみせた。更にゼルファはそのステッキをドラムスティックを回すようにくると指で回して上へと放り投げた。回転しながら落ちてくるステッキを、彼は両手で両端を押し潰すように受け止めると、そのまま合掌するようにステッキを手中で押し潰した。

ジョジュは楽しみに手品を見せる彼を見て思った。

(ピエロ？ いいえ。あの高く垂れ下がった鼻。少しだけ尖った耳にぶら下がるドクロのピアス。彼は、まるで……ジョーカーね……)

彼女が見守る中、ゆっくりと合わせた両手を開くゼルファ。手の中から赤い風船が現れ、彼は爪を立ててそれを割った。風船の中から小麦粉のような粉が舞い出て彼の手を汚し、手のひらは白い粉まみれになった。

風船が割れる音に合わせて、肩が一瞬ピクリと動いた事を悟られまいとするジョジュを見て、ゼルファはニヤリと笑った。

「これはいいヒントになる」

そう言っただけでゼルファはケタケタと笑ったが、ジョジュには彼の行動の意味が理解できなかった。彼女は静かに横に動いて間合いを取った。

「いつでも良いぞ」

退屈そうに身体力を抜いて立つゼルファ。ジョジュは右手の指の間に三本、左手に四本のナイフを挟むと、静かに臨戦の構えをとる。バレリーナのように片足立ちになり、右手を白鳥の首のように前方に掲げ、左腕を翼のように後方へ大きく広げた。これは、ス・ナウドのヴァンパイア達が速さを武器に戦う時に使う「スワン・ドライブ」という技の構えだった。

「ほほう。ス・ナウドは数有るヴァンパイア・クランの中でも、最速であることに重きを置く。そして、その構え、技の優雅さも実に美しい。ジョジュよ。お前のスワン・ドライブはどれほどの速さなのかな？」

緊張するジョジュとは対照的に、ゼルファはこの若い雛を試すことを楽しんでいた。ジョジュは切れ長で鋭い瞳を閉じて意識を集中する。呼吸をしないヴァンパイア同士の戦いは、吸う、吐く、といった生理的な間は存在しない。有るのは物理的な間のみだ。

(最初から全開で行くしかないわ)

次の瞬間、ジヨジユはゼルファの背後に現れた。指に挟んだ7本のナイフを鉤爪のように開いて背後から切りつける。しかし、そこに彼の姿は無く、攻撃は空を切ったが、ジヨジユはその先のゼルファの動きを予測して二本のナイフを投げた。両足で立っているクラン・マスターに通常の攻撃が当たるとは、彼女自身も考えていなかった。

(動かして、そこを狙わなければ)

彼女の投げたナイフはいずれも的を外れ、フロアの壁に突き刺さった。楽しげなゼルファの姿がゆらゆらとフロアの中央に現れる。

「うむ。少しは戦いのいろはを心得ているようだな」

彼は楽しげに笑った。

ゼルファの言葉を無視してジヨジユは再びドライブすると、ゼルファの周りを円を描くように回転し始めた。彼女の動きを、首をくるくると回して追いかけて、ゼルファは子供のように楽しげに声を上げて笑った。

ジヨジユの動きは徐々に速まり、回転する円の大きさも少しずつ縮まり始めた。そして、ドライブするジヨジユの動きが最高に速まった時、彼女は四方から同時に四本のナイフをゼルファのいる円の中央に向けて投げた。だが、またしてもゼルファの姿は消え、ナイフは誰も居ない円心へと飛んで行く。

跳躍して上へ逃れたゼルファの更に上空に現れたジヨジユは、渾身の、そして最後のナイフを投げた。

(頂きよッ！)

ジヨジユがそう感じた瞬間、ジヨジユは自分が描いた円の中心に

立っていることに気づいた。状況を理解するよりも早く、自分が投げたナイフが四方から、そして上空からも迫っていた。ジョジュは辛うじて身を翻したが、全てを避けきることができず、右肩と左の太股にナイフが突き刺さった。

「グッ……」

崩れ落ちるジョジュの目の前に、ゼルファがふわふわと落ちてきた。

「死んでしまおうかと思ったが、受け身を取って急所を外すとは、少しはやるようだな」

彼の足元で悔しそうに呻きながら、ジョジュは刺さったナイフを抜いて投げ捨てた。ふらふらと立ち上がる彼女を見てゼルファは言った。

「小娘よ、肩が汚れておるぞ」

「えっ!?!」

ジョジュが両肩に視線を落とすと、そこにはゼルファの両手に付いていた例の白い粉がついていた。彼女はテストの最後の一瞬で、ゼルファに捕まえられて円の中心に置かれたことに今気が付いた。

「そんな……」

「フハハハハ」

高笑いするゼルファの右耳から血が滴り、ドクロのピアスが床に落ちた。

「ほほう。」

ゼルファは感慨深げにそれを見下ろして、顎髭を撫でながらジヨジユを見つめた。

「うむ…… 約束は守らねばならんようだな」

そして彼はジヨジユの顔をのぞき込んで言った。

「よろしい。お主を我が克蘭、ゾーマの末席に加えるでしょう」

ジヨジユは傷口が閉じ始めた体でひざまづいて、恭しく頭を垂れた。

「感謝します。マスター・ゼルファ」

薄暗いホールの中に、ゼルファの楽しげな笑い声が響いた。

## 第8夜 弾丸は夜空に散って

(レヴィン、上手くそっちに追い込んだわ！)

悠里はテレパシーでレヴィンそう伝えたと、ビルの屋上から、冬のイルミネーションに色付く仙台の街並みを見下ろした。冬の風物詩として日本中が煌びやかなイルミネーションで飾られるようになるずっと前から、仙台のページェントは盛んだった。杜の都の代名詞とも言つべき並木道が電飾に彩られ、街に冬の訪れを告げる。悴かじかんだ手を暖炉で温めるように人々は集い、優しい輝きに心癒された。「空の上からページェントを見るなんて、あの頃は考えもしなかったわ」

平穏だった日々を思い出した悠里は溜息混じりにそう呟くと、加速して逃げる獲物の後を追ってビルの谷間を飛び越えていった。

一方、悠里から逃げるように高速で空を飛ぶヴァンパイアは、前方に突如ハンターの気配を感じて苛立った。

(挟み討ちなど！)

彼は更に加速して目の前のヴァマイラに大きく咆哮を上げた。レヴィンは突進してくるヴァンパイアの雄叫びにニタリと笑って応えると銃を構えた。

(野郎、かなりの速さだな……)

レヴィンは狙いを定めて二発の弾丸を放った。しかし、それは獲物に到達するよりも先に、何処からともなく放たれた別の弾丸に打ち落とされ粉々に砕け散った。レヴィンの弾を撃ち抜いたその弾丸は、相殺される事なく夜空へと消えていった。

「誰だ!？」

レヴィンが反射的に発射地点に目をやると、そこにはひとりの男の影が見えた。彼はレヴィンが再度ヴァンパイア目掛けて発砲するよりも早く、見事な早撃ちで吸血鬼を撃ち殺した。

「おい！ 俺の獲物だぞ!!！」

アタマにきたレヴィンはそう叫びながら、彼が身を隠していたビルの屋上へと飛び移った。その男は『やれやれ』というように手を広げたジェスチャーをすると、二歩三歩退いた。レヴィンはそのスペースに着地すると怒りを隠す事無く詰寄った。

「何なんだよ！ どのハンターか知らねえが、人の弾を撃ち落とすて獲物を横取りするなんて、いい根性してるじゃねえか!!！」

男はニタつきながら応じる。

「あんな遅い弾でス・ナウドの奴等を狩れると本気で思ってるのか？ 俺が撃ち落とさなくても避けられたさ。かわされれば奴の動きが直線じゃなくなる。そうなるのが面倒だから、お前の弾は撃ち落とすとしたままでだ。」

「テメエ、調子に乗るんじゃねえ!!！」

二人は同時に銃を抜いた。至近距離から真つ直ぐ伸ばした腕先の銃口は、互いの首元にピタリと届く。緩い夜風が二人の間を通り抜け、彼らの髪を揺らした。

レヴィンは目の前の男を睨みつけた。四十代半ば。青い瞳に無精髭、くたびれたカウボーイハットからはみ出したブラウンヘアは肩まで掛かるうかという長さ。淡い茶色のジャケットとジーンズにウエスタンブーツ。男は典型的なカウボーイスタイルだ。

「これなら邪魔される事無く獲物を撃ち抜けるぜ、西部野郎」

レヴィンは銃口を相手の首へと押し付けた。

「貴様の遅い弾なら、ここからだって避けれそうだな、パンク野郎」

二人が引き金に力を込めようとするその時、跳んで来た悠里が二人の銃を鷲掴みにして割って入った。

「ちよつと！ 何やってんのよ！！」

カウボーイは突然現れた悠里をまじまじと見つめて、からかう様に口笛を吹いた。

「まさにアジアン・ビューティーだな」

「アナタ、誰？」

悠里の目つきが少しだけ鋭くなった事に気が付いたカウボーイは、ゆっくりと銃をしまいながら後ずさった。

「俺の名はウィリアム・ヒコック。ビリーと呼んでくれ。」

ビリーはそう言っただけにニッコリと微笑んだ。レヴィンはあからさまに舌打ちをしてから、彼に問い詰める。

「んで、西部からこの街に何の用だ、ビリー」

ビリーは煙たそうにレヴィンに一瞥をくると、悠里に向かって答えた。

「この街に用は無い。俺が長年追っているヴァンパイアが、この街の南部の山に潜伏しているとの情報を得てやって来た。おい……聞いているのか？」

ビリーが話している間に、二人の携帯が同時に唸り出していた。このバイブのリズムはヨハンからの呼び出しだった。

「そうか……じゃあ精々気をつけて行くこつた。生きて帰って来れたら、その時でもケリを付けてやるよ」

気の無い返事を残してレヴィンはその場を後にする。悠里もビリーには見向きもせずヨハンの待つオフィスへと向かうためレヴィンの後に続いた。

「お、おい……」

ビリーは二人の突然の撤収に戸惑いながら二人を見送った。ひとり残された彼は、ブツブツと文句を言いながら冬の夜風に冷やされた頬を擦った。

第8夜    S t i c k   t o   y o u r   g u n s .

「ドゥーブルマロンのケーキとはいい趣味をしておるな」

コーヒーの香りが立ちこめる事務所内。ヨハン達三人が囲んでいるテーブルには、仙台でも旨いと評判のケーキ屋の箱が開けられていた。ヨハンは上司の特権を示し、大好物の抹茶ミルクフィューを自分の皿に取り分けると、小さなデザートスプーンを構えてニンマリと笑った。

「ミカの母ちゃんがわざわざ店に来たのか。電話でもよかったのにな」

レヴィンはそう言って、ベリー類がたっぷり敷き詰められたレアチーズケーキを取ろうとソファアから身を乗り出す。

「ミカはアルバトロスの事も忘れてしまったのね。記憶障害が酷いから、今頃は不安で一杯でしょう」

悠里はレヴィンが狙っていたレアチーズケーキを隙の無い動きで奪っていった。

「ここ数ヶ月の記憶が断片的で、自分がバイトしてた事や、店の名前も思い出せないなんて、シヨックだろうな」

レヴィンは助けを求めるようにヨハンを見たが、ボスはただ「諦めろ」と首を小さく横に振っただけだった。レヴィンは仕方なく赤いジャムで艶やかにコーティングされたモンブランタルトを自分の皿に取り分けた。

「お店にも迷惑が掛かるから、娘を辞めさせて欲しいって。全ては計画通り、なんですよね」

悠里の視線の先で、ヨハンがもぐもぐと頷く。

しばしの間、無言でケーキを味わった後、ヨハンが口を開いた。

「明日の店番はどっちだ？」

コーヒーをすすりながら悠里が手を挙げる。

「USVHA（ユスヴァ：ヴァンパイアハンター連合アメリカ支部）から援助要請が来ている。レヴィン、明朝の日の出と共に不忘山へ向かってくれ、集合場所は出雲神社だ」

「USVHA？ アメリカから来る奴って、凄く嫌な予感がするけど。USVHAから来る奴の名前は……」

「ウィリアム・ヒコック！」

三人が同時に声をあげる。

フォークを床に落としてうなだれるレヴィンを見て、悠里がクスクスと笑った。

翌日。南へ伸びる国道を一台のバイクが雄々しいエンジン音を響かせながら疾駆して行く。

ワインレッドにカラーリングを施されたハーレー・ダビッドソン・

ソフテイルを駆るライダーは、ヘルメットを着けず、変わりに被ったカウボーイハットを風に靡かせていた。彼はミラー越しに迫ってくる黒いシボレー・エル・カミノを確認すると、少しだけ速度を緩めた。

ビリーのハーレーに並んだレヴィンは、挨拶代わりにウィンドウを下ろす。昨夜の一件が後を引いている二人は、互いに真正面を見据えながら無言で並走していたが、暫く先の赤信号で停車すると、ようやくビリーが口を開いた。

「お前が相棒とは先が思いやられる。昨日のお姉ちゃんでも良かったんだぜ」

相変わらず前方を見据えたまま切り出すビリーに、レヴィンは赤信号を見つめたまま答える。

「アイツは大の男嫌いだから止めた方がいい。お前がケツにピンヒールを突っ込まれたらいつてなら、話は別だがな」

会話の途切れた交差点に、険悪な二つのアイドリング音が響き渡る。

「おいビリー、今想像しただろ。口元がニタついてるぜ」

「してねえよ！！」

思わずレヴィンを睨みつけるビリー。信号が青に変わり、レヴィンは脇目も振らずに無言でウィンドウを閉めて走り出した。彼の口車に乗せられて前方から視線を逸らしてしまったビリーは、悔しさのあまり先に行くエル・カミノの後姿に向かって思い切り吼えた。

「オレにそんな趣味はねえ！」

不忘山でビリーの追っているカリザという女吸血鬼の巣を探して数時間が経った。微かなヴァンパイアの香りを手掛かりに搜索を続け、二人はようやく彼等が潜伏しているねぐらの入口を発見した。

その朽ち果てた古井戸は、井戸本体を囲う井筒が崩れ落ち、井戸の口周りに積上げられた石が、辛うじて形を残しているだけだった。古びた外観とは裏腹に、内面は何者かの手が加えられた形跡があり、その痕跡は最近のものだと見て取れた。

「ここで間違いはなさそうだな」

レヴィンが身を乗り出して中の様子を窺う。水の臭いは無く、澱んだ空気を感じる。

「さっさと取り掛かるうぜ」

ビリーはレヴィンの肩越しに身を翻して井戸の中へと消えていった。レヴィンはやれやれと呟いて、彼の後を追った。

井戸口の真下は大きな空洞となっており、そこから奥へと続く幾つかの横穴が口を開けていた。

二人が着地して身構えると同時に、横穴から数体のヴァンパイア達が襲いかかる。二人は銃を抜き応戦したが、撃ち洩らした一体が物凄い速さでレヴィンに迫った。至近距離で放った弾丸もかわされ、レヴィンは堪らず広い空洞の中を逃げ回った。慌てるレヴィンの様子を見て、ビリーは愉快そうにニタニタと笑った。

「おい！ 見てないで助けたらどうなんだ！」

レヴィンが必死になってそう叫ぶと、ビリーはしぶしぶといった

表情で応え、見事な早撃ちで獲物を仕留めた。

「全く、酷い野郎だ」

「スマンな、助けてくれとは聞いてなかったものでね」

がっくりとうな垂れ溜息を吐くレヴィン。だが彼は、小生意気なビリーから一步下がると顔をそむけて小さくほくそ笑んだ。その瞬間、ビリーの背後の岩壁が盛り上がり、岩のゴーレムのような一体のヴァンパイアが現れ、大木のような太い腕でビリーを思いきり殴り飛ばした。呻きながら岩床を転がるビリーを見届けた後で、レヴィンは動きの遅いヴァンパイアの息の根を止めた。

「スマンな、教えてくれとは聞いてなかったものでね」

銃を収めながらレヴィンがニンマリと笑う。傷む腕を摩りながら起き上ったビリーは、銃を抜きレヴィンへと構えた。

「OK、これでチャラだ。もう、おふざけは無しだ。いいな」

「ああ」

ビリーはレヴィンの返事を聞くと、構えていた銃を彼に放り投げた。銃を受け取ったレヴィンはその銃を珍しそうに眺めた。

「その銃を使え。お前に渡したのがオルガ、俺のはバルディだ。瓜二つだが、俺のバルディは早撃ちがし易いように照準が削ってある。二丁の性能は同じで、専用に作られた弾丸は固く、そして速い」

レヴィンは近づいて両方の拳銃を見比べた。遠目では分からなか

つたが、ビリーの持つバルディは銃口にある照準器の山が、きれいに削り取られていた。レヴィンは昔見た西部劇で、早撃ちに臨むガンマンが、銃を少しでも早く抜けるようにと金ヤスリで銃口を削るシーンがあつた事を思いだした。

「第二波が来るぞ。弾は大事に使え」

ビリーの掛け声を合図に二人は銃を構えた。

## 第8夜 ふたつの罨

周囲に死臭が漂い、複数の横穴から一斉にヴァンパイア達が襲いかかる。二人は銃やナイフを巧みに操り、的確に相手を仕留めていく。飛んでは斬り、走り、撃ち、また走る。混戦の中、背中を合わせ、死角を補いながら、彼等は先程まで罵り合っていたとは思えないほどの連携をみせた。

第二派の半数を仕留め、数を頼りに攻勢をかけていた吸血鬼達も次第に勢いを失ってゆく。その時、横穴の一つから、ひとりの吸血鬼が現れた。

「やはり貴様が、ウィリアム・ヒコック。どうやら私に未練タラタラのようなだね。」

彼女はビリーにウィンクをすると、バレリーナのような優雅さでクルクルと回転をしてみせた。カルメンのような裾長のドレスが風を張らんで妖しく揺れる。赤黒い長髪の奥に光る殺気に満ちた微笑みと、激しい気性に彩られた冷たい眼差しがビリーを捉えた。

ビリーはその姿を見るや否や、彼女目掛けて激しく突進する。乱戦の中、レヴィンがレヴィンとビリーの距離が遠のく。

「罨だ、追うな！」

彼女がカリザだと気付いたレヴィンは咄嗟にそう叫んだが、ビリーは洞窟の奥へと逃れた彼女を追って横穴へと消えていった。舌打ちをして彼を追うレヴィン。しかし、目の前を塞ぐように現れた岩のゴーレムが、怪力でその入口を崩してしまった。

レヴィンは岩の化け物へと鬼化したこの下級吸血鬼撃ち殺すと、他の吸血鬼達の追撃を避け、近くの横穴へと飛び込んだ。そして、

振向きざまにオルガを横穴の天井に向け連射して入口を崩し、追手を遮った。

「やれやれ。この先が行止まりじゃなきゃ良いんだがな。」

レヴィンはそう呟いて、細い洞窟の奥へと身を屈めながら進みだした。

毛細血管のように入り組んだ洞窟の中、ビリーは前方に見え隠れするカリザの後を追った。もうすでに方向感覚は薄れ、レヴィンの血の気配も遠のいてしまったが、彼女の取り巻きすら現れないこの迷路の底で、ビリーはただ目の前の獲物にだけ意識を集中し、背後へと迫った。

「後少し……今だ！」

ビリーがバルディを抜き放った弾丸は、カリザのドレスをかすめて岩肌へ突き刺さった。彼女は背後から狙われるスリルを楽しむかのようにケラケラ笑い、大きく旋回しながら彼の視界から消えた。ス・ナウドのヴァンパイアであるカリザの瞬発力は凄まじく、弾丸などまるで恐れていないかのような優雅さだった。

ビリーは更に速度を上げ、彼女を追った。何度目かの旋回を繰り返した後、彼は突然大きなホールへと出た。そこは今までの洞窟とは違い、床には薄らと光るタイルが敷き詰められていたが、高い天井からは、巨大な鉱物のつららが何本も下がっていた。

血の臭いが充満する。ここは彼女の寝室、ビリーはそう確信した。

微かな風を感じた瞬間、ビリーは殺気の波を感じ前方へ突っ伏す。覆い被さるように迫るカリザに向けた弾は全て避けられ、そのまま襟首を掴まれると天井へと投げ上げられる。

ビリーは尖った岩のつららに突き刺さりそうな身体を辛うじて逸らすと、イヌワシへと姿を変えて滑空を試みる。

彼は、その瞬間になって、天井に巣くう大量の蝙蝠の気配に気が付いた。

第8夜 a loaded gun .

レヴィンはオオルリに成って入り組んだ岩窟の中を疾駆する。追跡するビリーの血の気配は微かではあったが、その距離は急速に縮まっていた。先を急ぐあまりスピードを出し過ぎた彼は、危うく岩壁に追突しそうになりながらも速度を落とすことなく飛び続けた。

レヴィンは、ありきたりな罠に掛かりカリザを追ったビリーを心の中で毒つきながら、何度も旋回を繰り返す。彼がようやくビリーの気配の真上にたどり着いた時、ビリーの周囲に突如ヴァンパイアの気配が湧くのを感じた。

「クソッ!」

レヴィンは今日何度も発した呪いの言葉を再び吐きながら、下層を目指し加速した。

イヌワシとなっていたビリーが身を翻して滑降するよりも早く、彼の体はコウモリに群がられ不規則な螺旋を描きながら地面へと叩きつけられた。

下僕の餌食となったビリーの姿を楽しげに笑うカリザの前で、人間へと戻ったカウボーイ。まとわりつくコウモリ達がヴァンパイアに変身するよりも早く愛銃バルディを抜くと、続けざまに数羽を撃ち殺した。そして直ぐさま、早撃ちでカリザを捉えようとしたが、すでに彼女の姿は消え、ビリーは背後から強烈な蹴りを喰らい、弾き飛ばされた。

ビリーは身を反転し背中中で床を擦りながら、カリザとヴァンパイア達を撃ち続ける。瞬く間に全ての下僕をしとめると、再び迫る力

リザの蹴りを闘牛士のように身を翻しながら彼女を捕え、喉元に銃口を押し当て引金を引いた。

カチッ。

バルディが虚しく撃鉄を打ちつける金音を鳴らし、それを聞いたカリザがニヤリと微笑んだ。

「レディーを前にしてタマ無しだなんて、情けない男ね。」

彼女はビリーの手を捻って足元をすくうと、ヴァンパイアの強靱な力で彼を投げ飛ばした。岩壁に激突したビリーは両手を着いて崩れ落ちる。

「待て………タイム、タイムだ」

襲いかかろうとするカリザに手をかざしながら、フラフラと立ち上がるビリー。肩で息をしながら、霞む目でカリザを見つめる。そろそろ限界のようだ。そう観念すると、ビリーは愛銃バルディを足元に投げ捨て、両肩を上げて愚痴を吐いた。

「弾切れで死ぬとは………情けねえ」

ビリーの弱気な言葉にカリザは攻撃の構えを解き、腰に手を当ててケラケラと笑う。

「あと1発だったのに可哀相ね。アンタを殺したら、上にいるお友達も直ぐに送ってあげるわ」

そう言って彼女が天井を見上げたその時、凄まじい轟音と共に天

井が崩れ、堅い鉱物のつららが一斉に降り落ちてきた。ビリーは不意を突いてカリザに突進し蹴り上げようとするも、その一撃は彼女の残像を払うだけで、空を切った。

カリザは天井から落ちてくる無数のつららをかわしながら怒りを露わにし、上空の獲物へと跳んだ。

血の力を最大限までパワーへと変換し、天井をぶち抜いたレヴィンは、遅い来る女ヴァンパイアをオルガで迎撃しながら急降下し、砂煙が舞う地面へと姿をくりました。

「ネズミども、喰い殺してやる」

カリザはレヴィンを追って滑降する。砂煙の中、三人の交錯する風の音が響いた。カリザのスピードは凄まじかったが、その速さを活かしてハンター二人を仕留めるには、この場所は狭すぎた。やがて三人は互いの間合いを計り、動きを止めた。静かに砂煙が消えてゆく。

「お前が弾切れなんてしてなきゃ、今頃はのんびりと一服してたハズなんだがな」

肩で息をしながらレヴィンがビリーを見やる。ビリーはカリザを睨みつけたまま言い返す。

「そもそも、俺のオルガをお前に貸したのが間違いだっただぜ。じゃなきゃ今頃は、迷子のパンク野郎を穴から引きずり出してたハズだ」

「ケツ、よく言っぜ」

そう言ってレヴィンは銃を構える。早撃ちの速度を上げるために削られた銃口が、カリザに向けられる。

それを見たビリーは、カリザに気付かれぬよう床に転がったもう一丁の銃を一瞥する。足元には砂に汚れたオルガが転がっていた。レヴィンは交錯の混乱に紛れ、自分が持っていたオルガと弾切れのバルデイをすり替えていたのだ。

バルデイを構え、レヴィンはゆっくりと撃鉄を立てる。カリザは脚を拡げてひと吼えすると、風となってレヴィンへと襲いかかる。彼女がビリーと彼の足もとに転がるバルデイの目の前を過ぎたその刹那、カウボーイは尖ったブーツの先でオルガを蹴り上げ、「伏せろ」と叫ぶ。ニタリと笑うレヴィンの顔で、全てを悟ったカリザは、急旋回で身を翻した。だが、彼女の額はオルガの弾丸で撃ち抜かれ、後ろへと弾き飛ぶ。獲物を掴むように伸ばした鉤爪は虚しく空を掴んで、灰となった。

夕陽を浴びながら並走するシボレー・エル・カミノとハーレー・ダビッドソン・ソフテイル。磨き抜かれた二つの車体には、綺麗な夕陽が映し出され、オレンジ色に輝いている。

仙台港へと曲がる交差点の信号で止まった二人は、一言も交わさずに前だけを見ていた。やがて信号が青に変わると、レヴィンは運転席のウィンドウを下げた。ビリーがゆっくりと左拳を突き出し、レヴィンは何も言わずにその拳に拳を合わせた。

右折して港へと向かうハーレーの後ろ姿を横目で見ながら、レヴィンはゆっくりとアクセルを踏んだ。

「また会おうぜ、カウボーイ」

夕暮れの風に、心地いいハーレーのエンジン音が響いた。

## 第9夜 予感

「おめでとございます！！」

ミカはチヨキを出したまま呆然としていた。

「一番町四丁目商店街。お年玉じゃんけん大会！ 優勝者はこちらのお嬢様に決定です！！」

湧き上がる拍手の中、固まったまま動きかないミカを見かねたシユンが、ステージにあがり固まったミカを揺さぶる。

「ミカ！ 凄いじゃん」

ようやく我に返ったミカは会場の歓声に照れ笑いを返しながら、ポリポリと頭をかいた。

イベントアテナダントの女性が大きなパネルを持って現れると、司会者はもう一度観客に拍手を促し、寒空の勾当台公園は再び歓声に包まれた。

ミカは「イタリアンの巨匠、ピエトロ・ストツパーニと行く松島クルージングディナー」とかかれたパネルを何度もお辞儀をしながら受け取り、突き出されたマイクにしどろもどろになりながらボソボソと感想を呟くと、ステージを降りた。

司会者が閉会を告げると、人々は寒さに息を白ませながら散り散りに解散してゆく。ミカはすれ違う人々の祝福に照れながら、公園のベンチにシユンと並んで腰掛けた。

「ほんとに勝っちゃうなんて凄いな、ミカ」

興奮気味に話しかけるシュン。ミカはテヘへと笑いながら、ペットボトルのウーロン茶を飲み干した。

「なんかね、勘が冴えてるみたい。最近のアタシはジャンケン強いよ」

ミカはそう言ってシュンにニンマリ顔で微笑む。そして飲み干したペットボトルを物足りなさそうに眺めた。退院してから、なんとなく喉が乾く。たぶん、手術や薬のせいなんだろう。ミカはそう思っただけで、シュンのコーラをかすめ取ると、ゴクゴクと喉に流し込んだ。

三週間後。二月の三連休を利用して、ミカは両親、そしてシュンと一緒に三陸沖を航海するクルーザー、メッツアルーナ号のレストランで、豪華なディナーを満喫していた。

テレビで見るよりストッパーは小柄だね。そんな話で盛り上がりながら、四人は最上級のイタリア料理を楽しんだ。メインディッシュを堪能し、ティラミスとコーヒーが運ばれはじめた時、ミカは不快な寒気を感じた。

「ごめんなさい。少し船に酔ったのかも」

彼女はそう言って席を離れ、レストランを出てトイレへと向かった。船酔いなんて何年もしてなかったけど、こんな感じだったかな？ 高熱が出る前の寒気にも似た感覚に戸惑いながら個室に鍵をかけ、タイル張りの壁に寄りかかる。

(この感覚。つい最近……でも思い出せない)

ミカは寄りかかったまま眉間を指で摘み、この感覚が何かを思い出そうと屈みこんだ。

脊椎が冷えるようなこの感覚、何故だか分からないが、早く思い出さなければという緊迫感が、凄まじい勢いでミカの体中を流れた。答えはそこ、もう直ぐ目の前まで来ている、そんな気がしたその時、船底から鈍い衝撃音が微かに聞こえ、メツツアルーナ号は小さく揺れた。それは、静かな個室に居なければ気付かない程、小さな音と衝撃であった。

レストランでは食事を終えた乗客たちが、ストップパーニのスピーチに耳を傾けていた。ミカの戻りが遅い事を気にかけていた彼女の母が、静に席を立ち出口へと歩き出したその時、室内の明かりが消え、誇らしげにお喋りをしていたストップパーニのマイクも途切れた。突然の停電に乗客たちがざわつき始めたが、非常灯が暗闇を照らし始めると、それは悲鳴へと変わった。

薄明かりに照らし出されたステージの上で、首が不自然に折れ曲がったストップパーニが、自らの血の海に転がっていたのだ。パニツクに陥った乗客たちは一斉に出口へと殺到したが、次々に見えない何者かによって首の骨を折られ、床に転がっていく。

「相変わらず臆病者だねえ。どうせ皆殺しにするんだから姿を見せたっていいじゃない、シャオ」

錯綜する人ごみの中、黒い中世のドレスに身を包んだ黒髪の東洋人女性が腕組みをしながら素っ気無く言い放つ。彼女の口からは血が滴り落ちる。ミカの母は直ぐ隣に現れたこの悪魔から逃れようと

したが、肩を掴まれ引き戻されると、そのまま頸動脈に牙を埋め込まれ、吸血され息絶えた。

混乱状態のレストランで、ミカの父はシユンにキッチンから外へ出るように言うと、自分は妻を探して彼女がいた方向へと進んだ。むせ返る血の臭いの中、逃げ惑う人々にぶち当たり、それを掻き分けるように前へ。

不意に胸に痛みを感じると、自分の胸から人の手が突き出ているのが見えた。口から血を吐き、崩れ落ちる。目の前には見覚えのある妻のドレス。最後の力を振り絞って抱き寄せた妻の亡骸は、血を吸われ老婆のように変わり果てていた。

それでも彼は面影の残る妻の頬を指でなぞって微笑むと、ゆっくりと息を引取った。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0584g/>

---

BLUE DAWN

2011年8月16日01時14分発行